

おまかせ!



ロボット工学の父・Dr. ライト
人型ロボットの基礎を作り上げ、
人とロボットが共存するより良い
世界の為、日々研究に没頭している

そんな中、博士は
家庭作業用人型ロボット
『ロール』の改良に
精を出す……

そう……多くの人から尊敬される
博士は個人的欲求を満たす為に
ロールを作り出したのである

とどのつまり
彼も男なのだ

家庭作業用人型ロボット

『ロール』

博士の執念とも呼べる
研究の結果、ロールは
初期のスペックを超える
男性奉仕用人型ロボット
へと進化した……

After♡



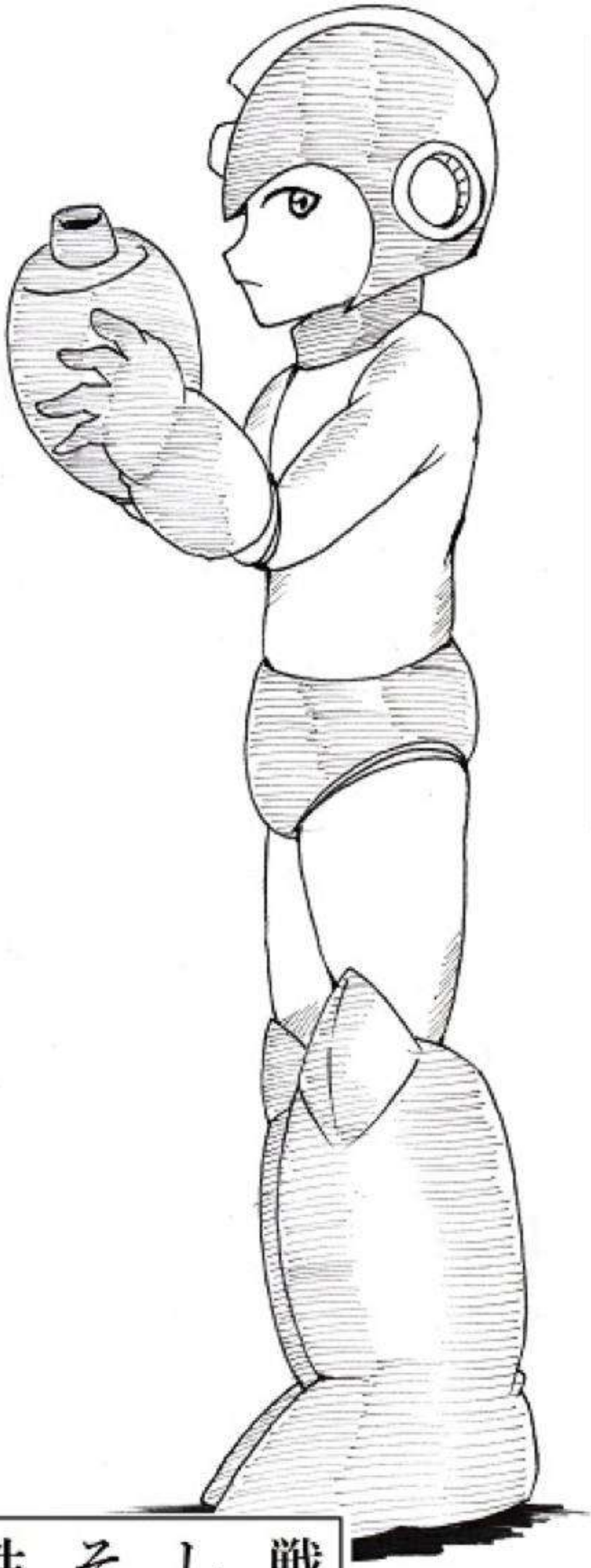
Before♡



外見だけでなく、男性が
望むあらゆる作法を身に
つけた理想的な女性
そのものであった

ロールと同じ家庭用ロボット
だったロックだが、
ドクターワイリーの魔の手
から人間を守る為、自ら
戦闘用ロボットに改造
してもらった

幾度となく続く戦いの日々で
逞しく成長して行くのだが、
家ではロールちゃんに
甘えまくる可愛い一面もある



心優しい彼だが、ロールちゃん
にはちよっぴりイジワルな事も
したりする

戦闘用に改造した事の副作用と
して性欲が異常に高まってしまった
その為、博士はロールにロックの
性処理をする様命令している

「博士、今日も研究
お疲れ様でした。」
「ロール、その格好は？」

「お疲れの博士を
労おうと思つて…
お気に召しませんか？」

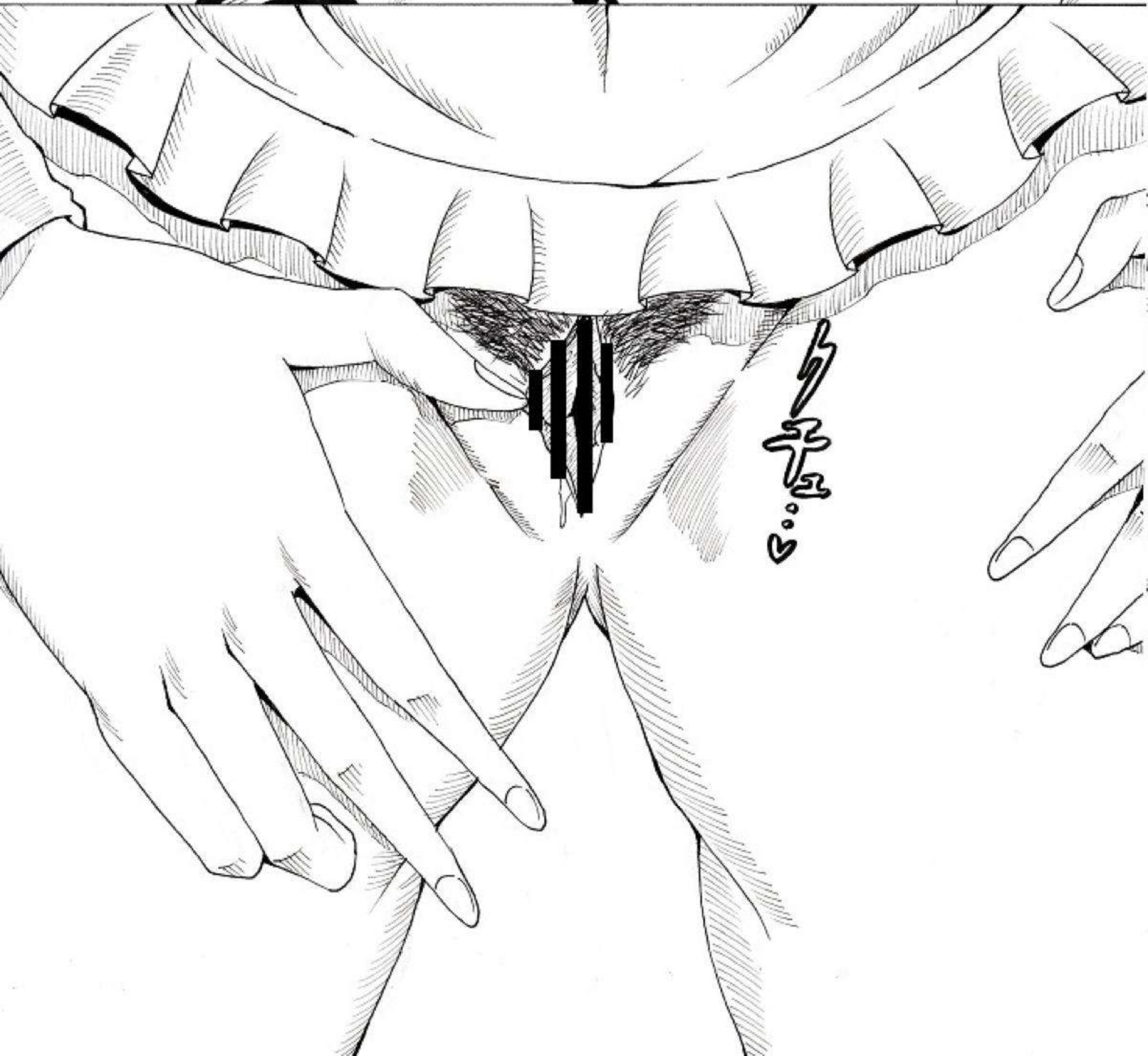
「いや、そんな事は
ないよ」

「良かったらもっと
近くでご覧になつて
下さい」
「そ、そうじゃな…」



「見えますか、博士？」
「綺麗だよ、石鹸の
良い匂いだ。それに…」
「それに？」

「ほんのりいやらしい
メスの匂いもするな」
「もう、博士ったら…」



「もっとよく見て下さい♥
その為にノーパンで待って
いたんですから……♥」

「そうだったのか。
ロールは本当に優しくくて
スケベな女の子じゃのう……」

「まあ、博士がそういう風に
作って下さったんじゃない
ですか♥」

そう、長年改良を重ねた
ドスケベエロチップを
組み込む事で今のロールが
完成したんじゃない。
わしって天才！



「博士、私何だか
口が寂しくて……」

「ほ、ほう……」



「宜しければ、さつきから
腫れてる博士のソレ……
しゃぶらせて頂けませんか？」

「ソレ……とは？
ハッキリ言ってくれんと
分からんぞ、ロール……」

「はい。私のエッチな格好見て
年甲斐もなく勃起した博士の
おち●ぽ……精一杯ご奉仕します
しゃぶらせて下さい……♥」

「そこまで言うなら仕方ない
よし、しゃぶらせてやろう」





「いけませんよ、博士

3日もお風呂に入っていないから…

おち●ぽくちやいくちやいですよ♡

博士は包茎なんですから、ちゃんと

洗わないとチンカスが皮の中で

溜まってしまいますし…」

「すまん、研究に夢中に
なってしまうって…」

ぽくちやい♡

「冗談ですよ♪

博士のおち●ぽ掃除も

お手伝いロボットである

私の役目ですから♡」

そう、ロールの舌技は数多の

風俗嬢のデータを元になっている

フェラチオのテクも天下一品じゃ！

「それじゃあ博士の
おち●ぽにこびりついた
くっさくてえきったない
チンカス♥取り除いて
いきますね♥」

「む、すまん
頼むよ、ロール」

♡♡♡♡♡





「気持ち良いよロール……
頬と舌で上手に擦るのお……
これならわしの頑固な
チンカスも綺麗に取れると
いうものじゃ♪」

「口の中に唾液を溜めて……
んん……どうれふかあ？」

「どれ、ロール
見せてごらん」

「はい…」

「ほほお、沢山
取れたのお…」



「博士…
チンカスごっくん
しますか？」

「うむ、それじゃあ
まずはよく
味わうんじゃぞ」

「味わう？」

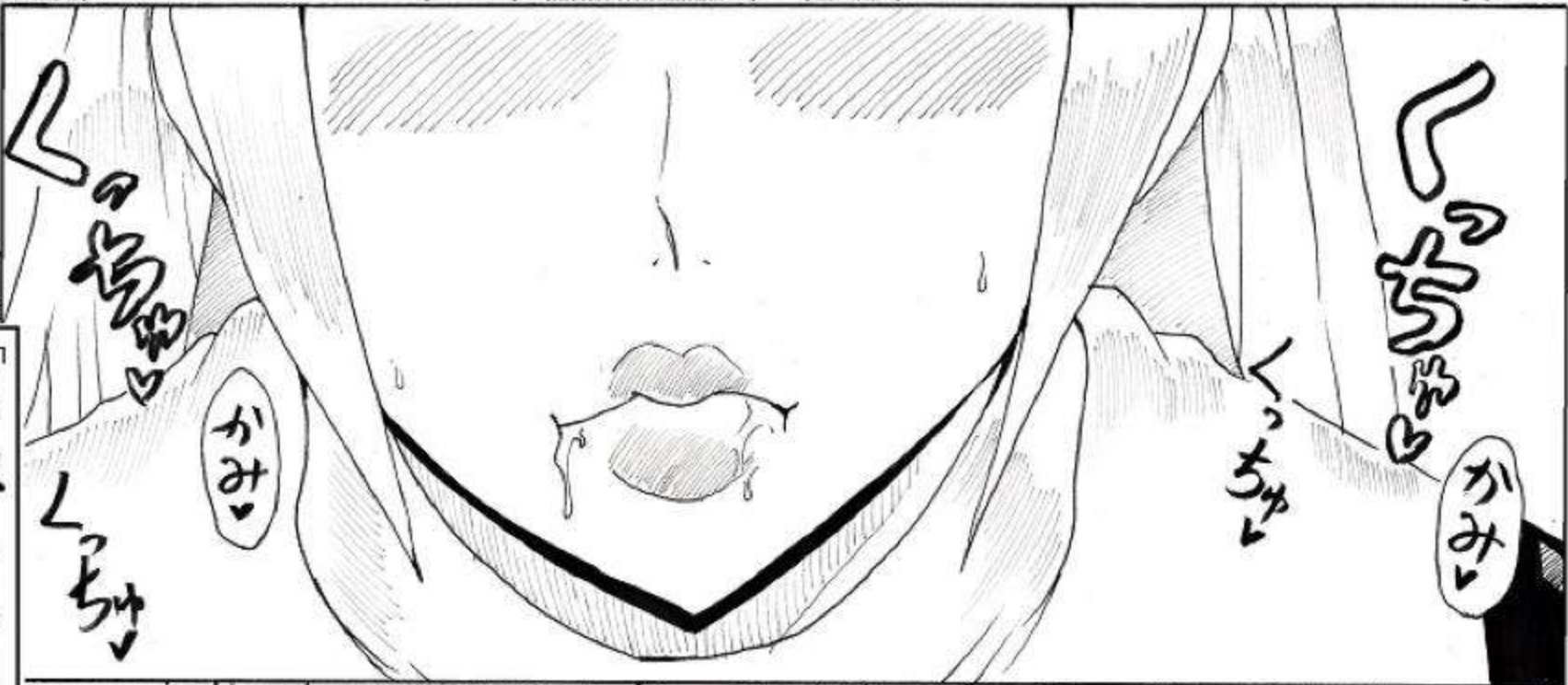
「口の中で
よく
噛むんじゃ。
舌の上で味と
食感を楽しむ
のじゃ。」

「もう…
博士ったら
ヘンタイなん
ですから…♥」

「いやらしい音をたておって…
最高じゃ、ロールよ♪」

「うっ…ふ…
ぐふっ…❤️」

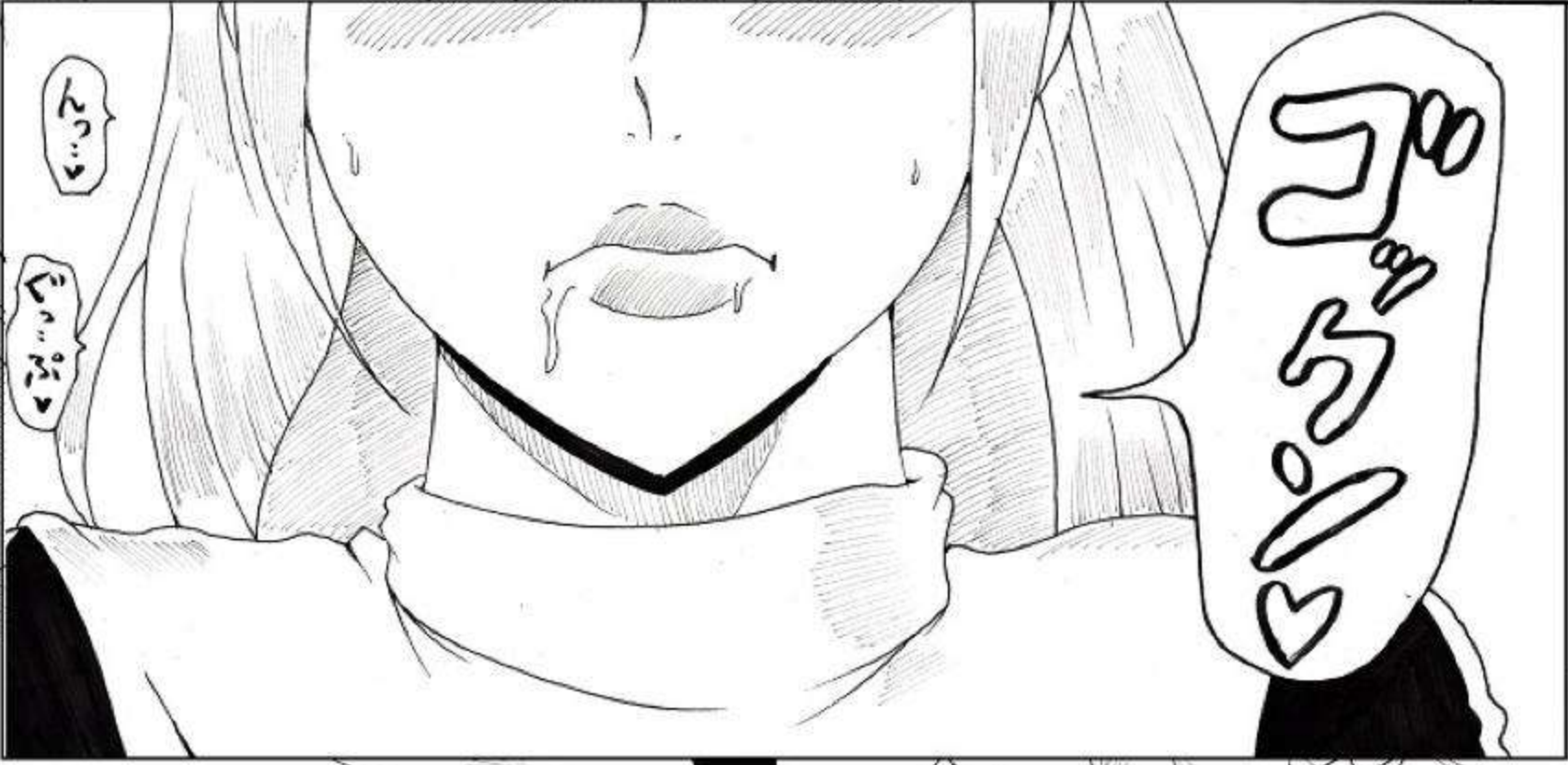
「ふっ…
んん…❤️」



「偉いぞ
よく味わうんじゃ」

「よし、そろそろ
いいじゃろ
ごっくんしなさい」

「いいぞ
偉いぞロール」



「しかし、流石に苦しい
様じゃな。無理もない」

「それなのにお前は
わしの為に……」

「す、すいません
思わずゲップが…」

ゲ
エ
エ
エ
エ
ッ
プ

(博士のチンカス
臭すぎ…)

後でしつかり

うがいしないと

ロツクに臭いって

言われちゃう…)

「くおお、なんという
高速フェラ！思わず
射精しそうじゃ……！」

「むうう……」

「分かつとるよ、わしの溜まった精子
一滴残らずロールのおま●こに注い
であげるからな。チンカス掃除して
くれたご褒美をやらんとな」

「♥♥♥」

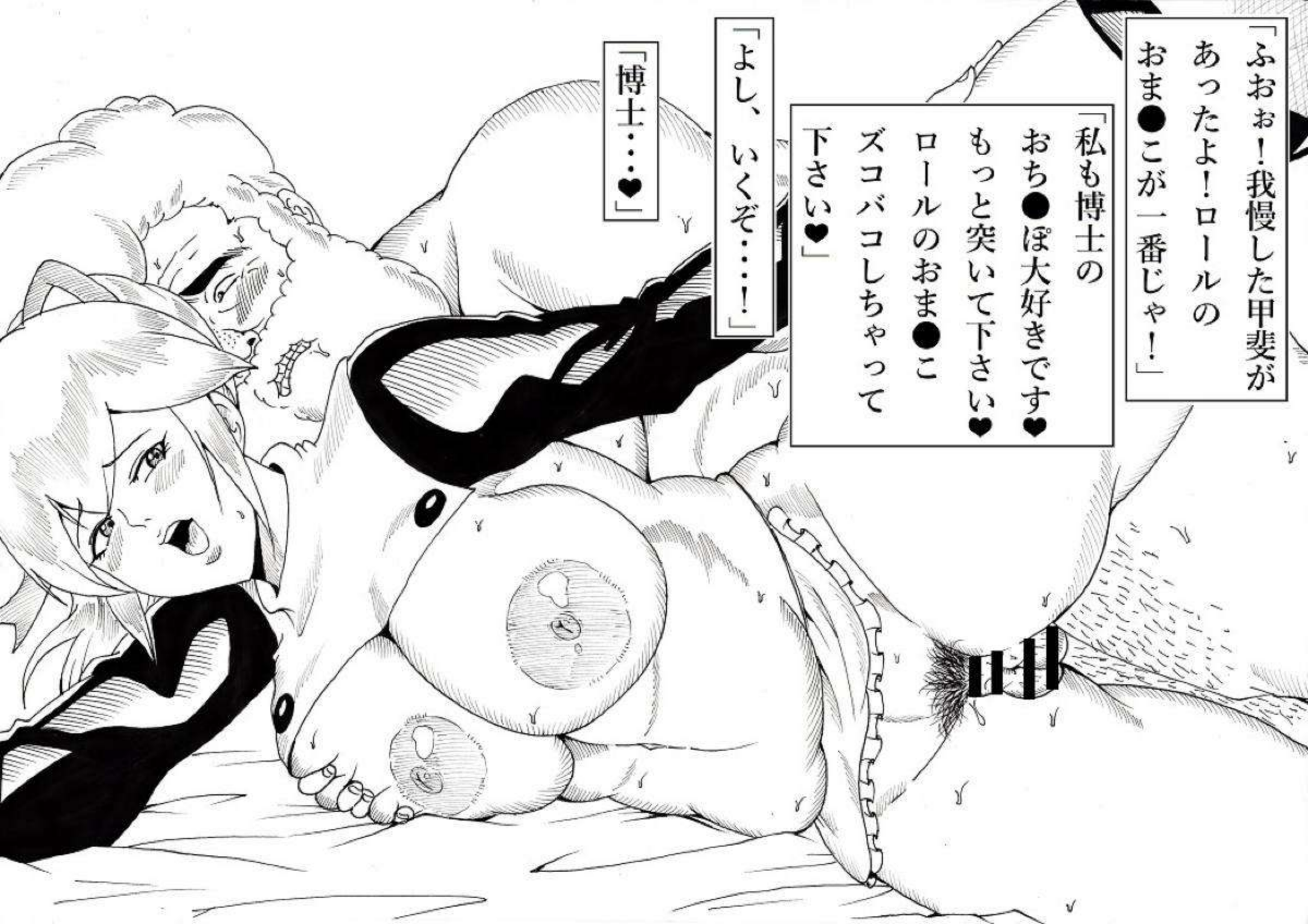


「ふおお！我慢した甲斐があつたよ！ロールのおま●こが一番じゃ！」

「私も博士のおち●ぽ大好きです●
もつと突いて下さい●
ロールのおま●こ
ズコバコしちゃって
下さい●」

「よし、いくぞ……！」

「博士……」



「イグう!!」

「博士のザーメン来ました♥
3日振りの射精、ロールの
おま●こに注がれています♥」

「まだ…
出るぞお!」

「ああ♥博士の
ドロッドロで
くっさい汚ザーメン
もっどどっぴゅんして
下さい♥」





「博士、お疲れ様でした
ご満足頂けましたか？」

「ああ・・・
大満足だよ」

「それは何よりです♥
私も博士のお陰で
満たされました・・・♥」

「おはようロック」
「おはようロールちゃん
…ねえ…しよ？」
「もうせっかちさんね。
今博士の朝食作ってる
でしょ？」

「昨日は博士が
ロールちゃんを
独り占めしてたでしょ
今日は僕だよ…！」

「あらあら、困った
正義の味方ね…♡」



「きゃっ♡

ロック、ダメよ」

「無理だよ、ロールちゃん
僕もう我慢出来ないもん」

「だからってそんな所に
顔を突っ込んで……」

「だって、朝食の支度してる
ロールちゃんの後ろ姿を
見てたら……」

「もう、私のお尻見て

ドキドキしちゃったの？」

「うん……」

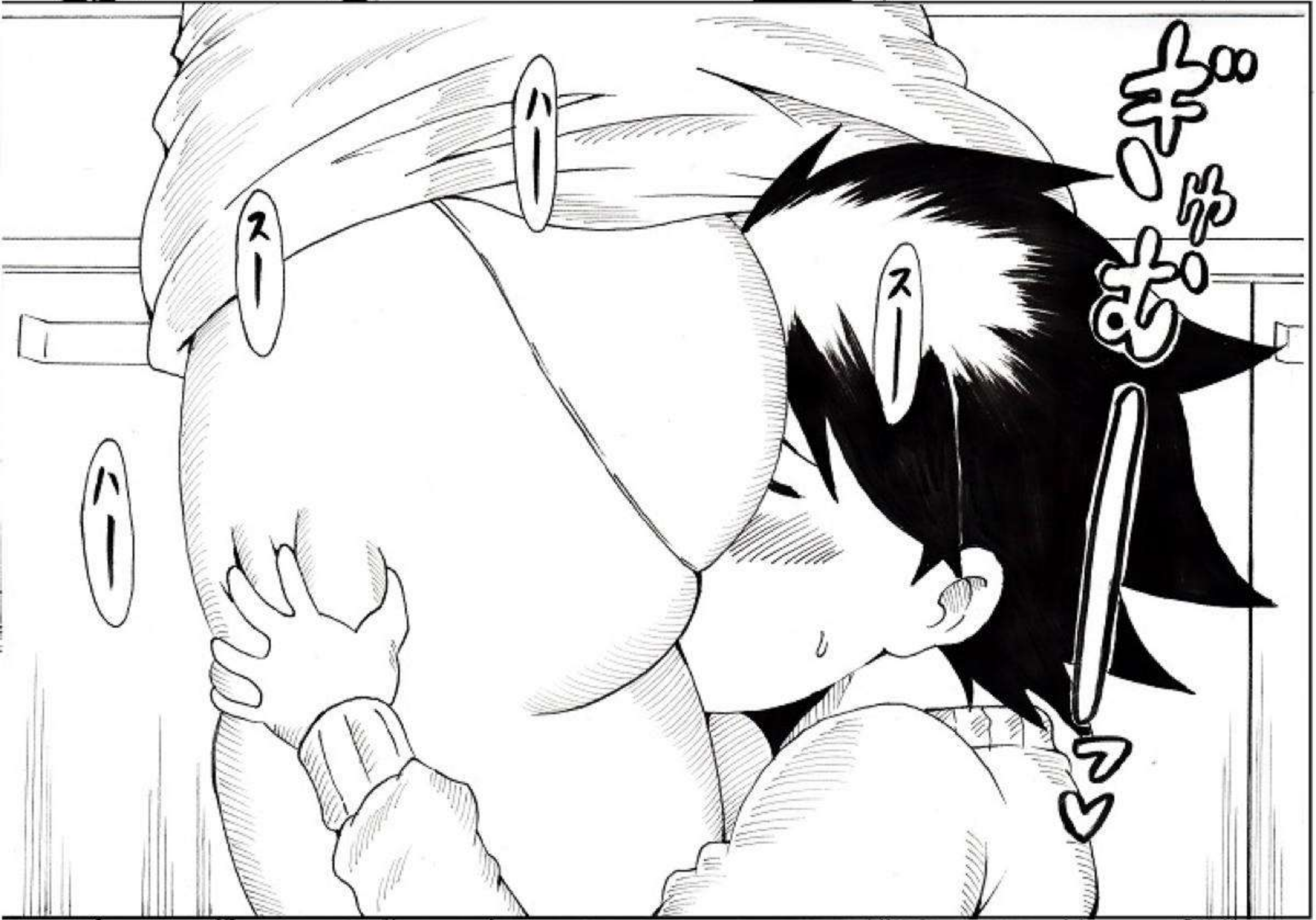


「ロールちゃんの大っきいお尻……
柔らかくて良い匂いがする……」

「はいはい、それじゃあ
そろそろ博士を起こして
来てくれるかしら？」

「そんなあ……」

「博士は今日学会で帰りが
遅いから……だから
後で……ね？」



「分かったよ
今日は僕が
ロールちゃんを
独り占めする
からね！」

「ええ、約束よ♥」

(こんなに必死になっちゃって
ロックしたら可愛いんだから♥)



「ロールちゃん！」

「ロック、焦らないの」



(博士に頼まれて
今日のごことは記録
する事になってる
のよね：：♡)

「さあ、ロック
私のおま●こに
おち●ぽ：：
ぶち込んで♡」





「気持ち良い！
気持ち良いよ
ロールちゃん！」

「いいわ、ロック
これ私も気持ち良い
所に当たってる♥」

「うわあ！
ロールちゃんの
ま●こ！ま●こ！
気持ち良いよお！」

（ロックの性欲剥き出しの
独りよがりセックス…
これはこれで…
興奮しちゃうのよね…♥）



「今日は僕の・・・僕だけの
ロールちゃんだ！」

「そうよ♥今日は

ロック専用ま●こ♥」

「僕の専用ま●こ！」

専用ま●こだ！」

「やだ・・・ロック
男らしい突き♥」

「ロールちゃんのみ●こ！」

ロールちゃんのみ●こ！」

ロールちゃんのみ●こ！」

「ちよつとエッチ
しないとすぐ
お猿さん
になっちゃう
んだから・・・♥」

「ロール・・・ちゃん」

「きて・・・
ロック♥」

「これは良い画が
撮れてそうね・・・
博士に内緒で
コピーして
観賞用にしておき
ましょう・・・♥」



「出るよお・・・!!」

「ああ・・・♥来てるわ♥
ロツクの活きの良い
プリプリロボット精子♥」

「出る・・・ああ・・・
まだ出るよお！」

「おま●この中で精子
飛び跳ねてるう・・・♥」



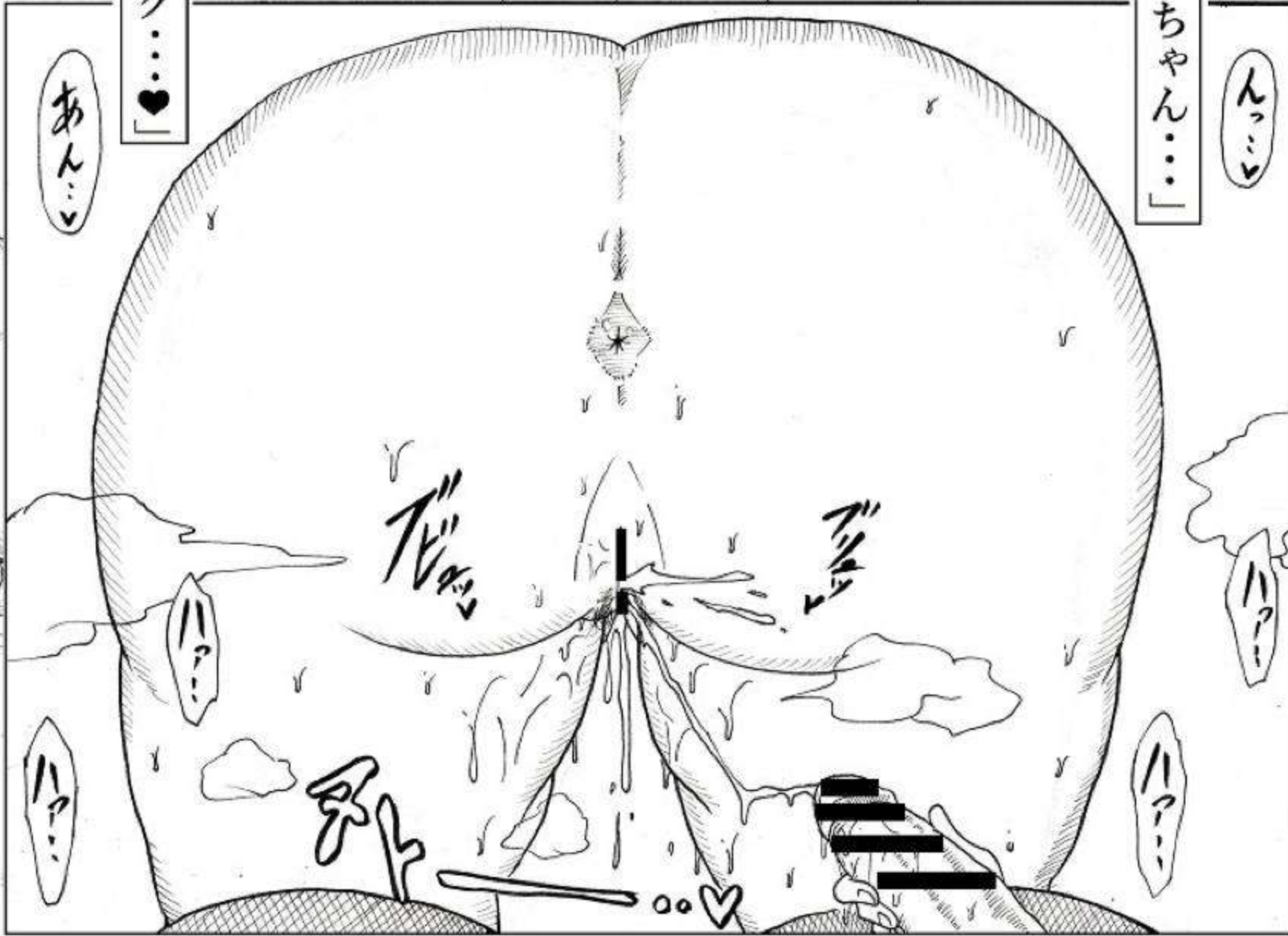
「ロールちゃん…」

んっ♡



「ロック…♡」

あん♡



「ねえ…また
入れている？」

「いいわよ♡
E缶も沢山あるから
体力は気にせず
思う存分楽しんで
ちょうだい…♡」

「ロール、今日も
お願いできるかな？」

「勿論です。
では準備しますね」

「ああ、頼むよ」

「まずは博士のおち●ぽに
たっぷりローションを
塗って……まあ博士ったら
もうこんなにお元気に……♡」

「そうなんじゃ……」

「すぐ楽にして
あげますからね♡」



「力加減は如何ですか？」

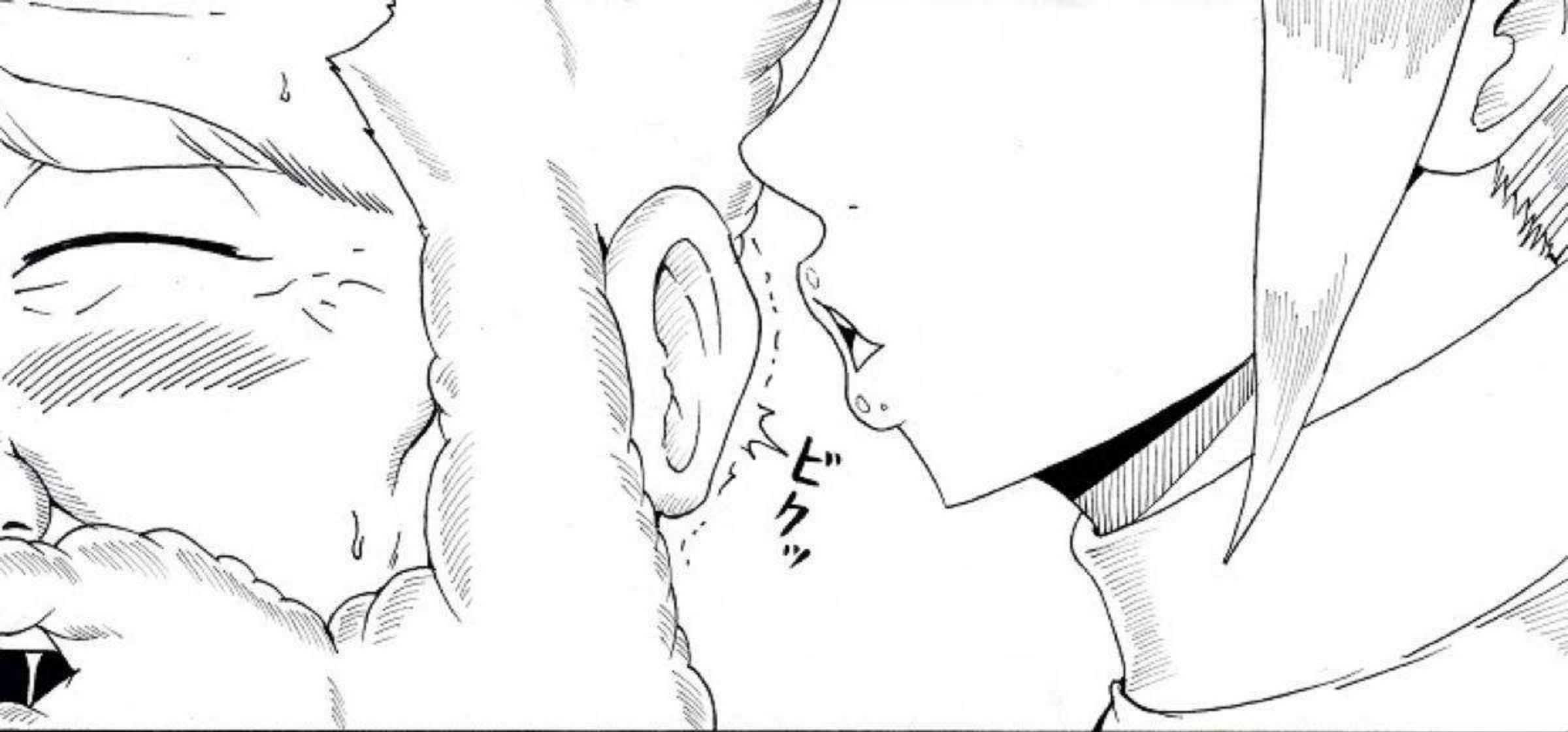
「お、おお・・・」

「良い感じじゃ・・・」

「それじゃあ

続けますね♥」





どクッ

「先日あんなに出したのに
もうこんなにお元気だ
なんて・・・博士は頭脳だけ
でなく、下半身も一流
なんですね・・・♡」

「おふ！耳元でそんな・・・
息がかかって・・・」

「その歳でまだ現役
なんて・・・いつまでも
女性を悦ばせる誰もが
羨む理想の男性です♡」



「こんなスケベで
素敵な一流ち●ぽを
しごかせて頂けて
私、光栄です♥」

「そこまで言ってくれる
なんて嬉しいよ……」

「ふふ、次は
どうしますか？」

「おお、それじゃあ
キ、キスをして
くれないか……？」

「……はい♥」



「おお！
イクツ……！！」

「ふふ、博士……一滴残らず
ぴゅっぴゅっぴゅっぴゅっぴゅっ
しようね♥」



「スツキリ

しましたか？」

「見て下さい

博士のザーメンが

私の膝に……」

「ぶっかけて

しまったな……」

「ああ……ロール

ありがとう」

ハア

ハア

ハア

ド
ク
ォ
……♡

「はい……♡」

「ちよつとロック……
これは一体……？」

「博士の部屋に
置いてあったんだ
これでロールちゃんは
僕の思い通りだよ……♪」

「もう、また変なもの
観たんでしょ……
それにしてもその
バスターは……」

「うん、これで
ロールちゃんを
昇天させるんだ♪
でも、その前に……」

「やんっ♡
ロツク……♡」

「ロールちゃんの
ま●こ汁……
？いつもと味が
違うような……？」



「ロツク……
ダメ……♡」

（さっき博士に中出し
されてまだ洗って
ないのに……）

「少し、苦い……？」

（それは博士のと私のが
混じってるから……）

「そうか、わかったぞ
動けなくされて
興奮してるんだね！
それでいつもより
エッチな汁いっぱい
出してるんだね！」

「そ……それは……」



（ああ……違うのロック
それは博士のザーメンと
私のまん汁が混ざった
ドスケベブレンド汁なのお……♡）

「ロールちゃんもこんな臭い汁
出すんだね！臭い……臭いよ
臭いの嗅いで興奮しちゃう！」



「あれ？ここは臭くないな……」

「きゃ♥そ、そんな所舐めちゃだめよ……♥」



「綺麗にしてるんだねでも、僕今は臭いのがいいんだよね……」

「も……ロツク……」

「ああ、そうだった……お待たせロールちゃん僕のロツクバスターで昇天させてあげるからね♪」

「ロツク・・・そんないきなり激しい・・・♥」

「だってもうこんな濡れてるんだよ？
だったら構わないでしょ？」

「それはそうだけど・・・
女の子にはもっと優しく
してあげるものよ・・・♥」

「うるさい！
今は僕の思い通りに
出来るんだ！
えい！えい！」

「あんっ♥
ロツク、ダメ・・・♥」





結局この後

ロックが飽きるまで
イカされ続けました

「ふふ、今日はこの様な趣向がご希望なんですね
博士だったら研究以外ではこんなことしか興味が
ないんですから：：♥」

「何を言うか
男などみんな
そんなものだよ」

「ケツ穴ほじってち●ぽ
シゴいてくれっ！
だなんて普通言いますか？」

「それは：：
まあ：：」

「ふふ、お気になさらないで下さい♪
さあ、力を抜いて：：」



「それじゃあこれは
どうですか？」

「はうっ！」



「流石です
博士……
すんなり
入りましたね」



「ぬう……」

「んふっ♡
お尻、ちよつと
匂いますね…♡」

「舌！ロールの舌が
入ってくるぞお!!」

「右手が
余っちゃい
ましたから
金玉マツサージ
もしちやいます
ね…♡」

「中でぐりぐり回転させたり…
舌を出し入れしたり…♡」

「うほお!!
いいぞ、ロール!!」



「お次はこれです♥」

「おっ！おほお！！」

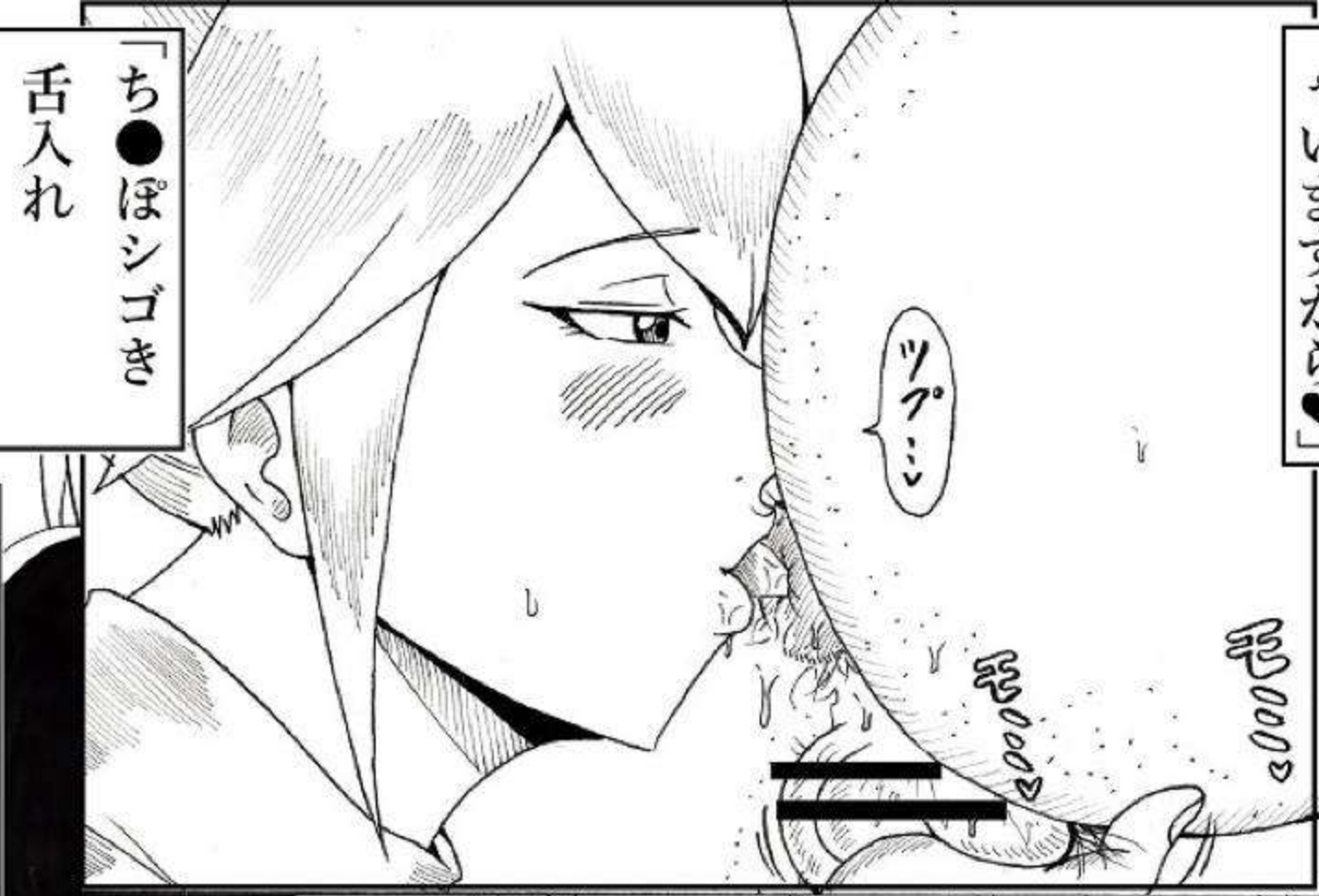
「ち●ぽシゴきい！！」

「欲張りな博士に
ロール頑張っち
やいますから♥」

「ち●ぽシゴき
舌入れ
金玉マツサージ
のフルコース
じゃあ！！」

「さあ…いつでも
どっぴゅんかまし
ちやっして下さい♥」

「くる…
くるぞお…
ロールウ…！！」



「おっほおう!!」

「やあん♥

出ましたあ♥

博士、どっぴゅん

かましちやい

ましたあ♥」

「はあ……ロール……

気持ち良かったよ……」

「わしの変態趣味に

付き合ってくれて

本当に感謝して

おるよ」

「ほんと、人には話せない

ことですからね♥

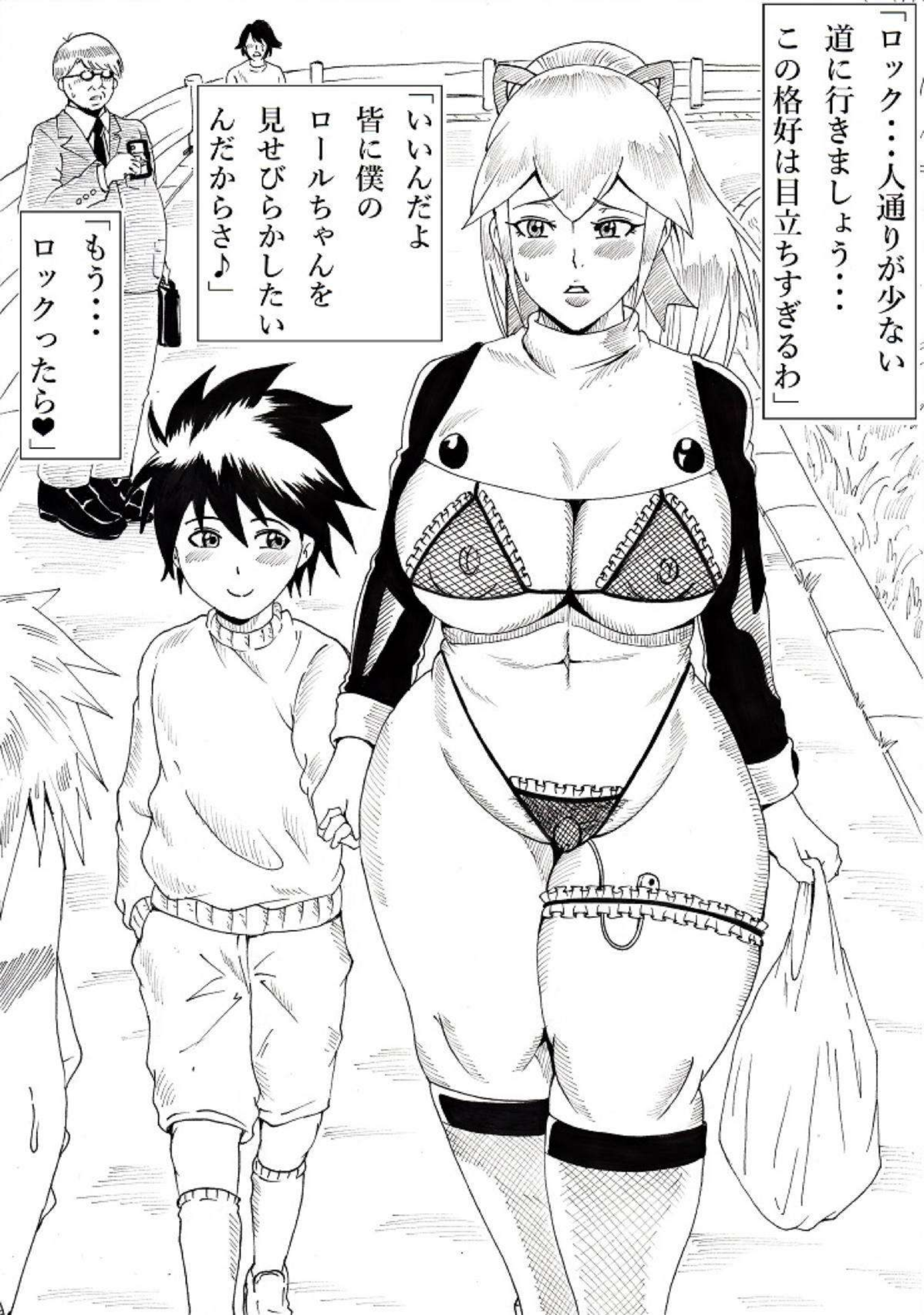
私が面倒見てあげます♥」



「ロック……人通りが少ない
道に行きましよう……
この格好は目立ちすぎるわ」

「いいんだよ
皆に僕の
ロールちゃんを
見せびらかしたい
んだからさ♪」

「もう……
ロックつたら♡」



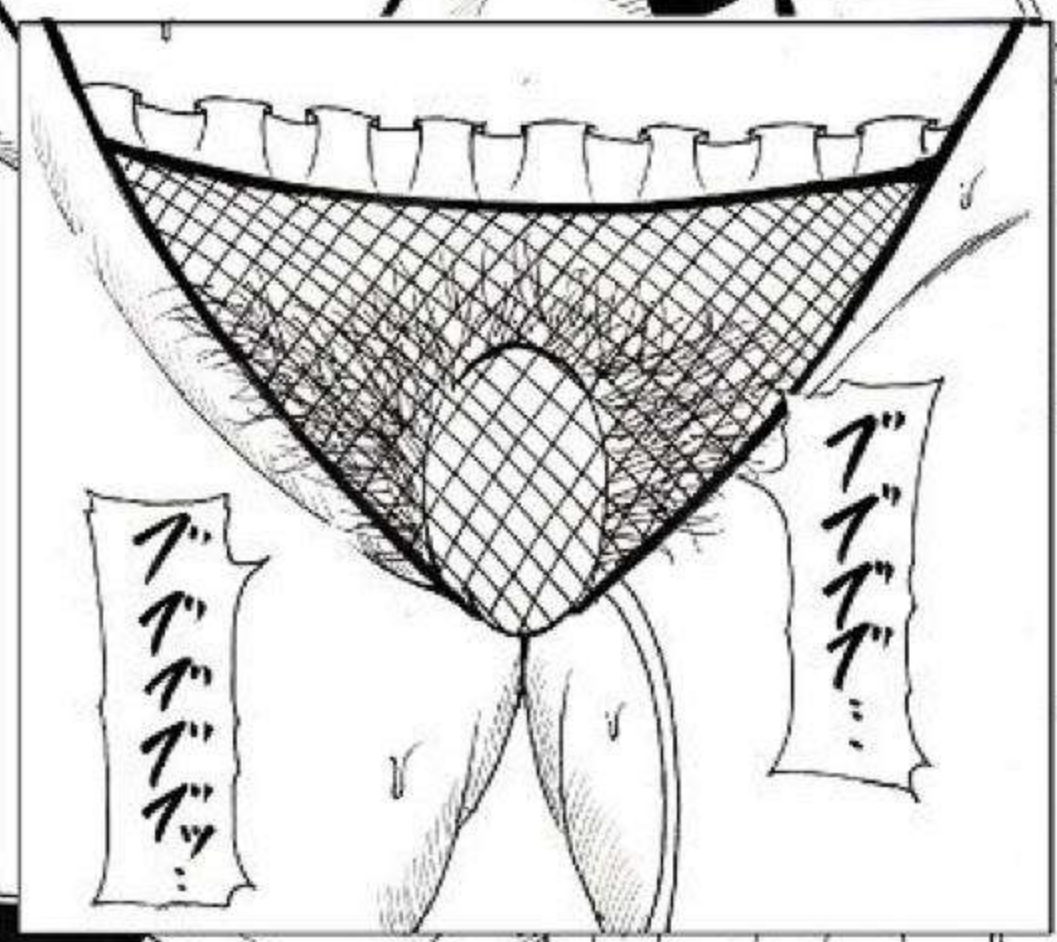
「ねえロツク…
これ…止めない？」

「ダメだよ、そういうプレイ
なんだからさよ」

「でも、こんな格好で
街を歩いて…バイブ
だって仕込まれて…」

「あんまり歯向うと
バイブのパワー
上げちゃうよ？」

「…分かったわ」



ブブブブッ…

ブブブブッ…

「お尻なんか丸出しで……
恥ずかしいわ……」

「うん、大きなお尻
丸出しでみっともない
よ、ロールちゃん♪」

「もう、ロツクの
イジワル……」

「すげーあの姉ちゃん
ケツ丸出しだよ……」

「なんと大胆な……」



「周りの男達が食い入る様に
ロールちゃんのお尻見てるよ♪
でも、このでか尻に顔突っ込んだり
舐めたり、揉みしだけるのは
僕なんだけどねえ♪」

「ぶるんぶるん
揺れてる……」





「ロールちゃん
見てごらん
皆嬉しそうに
カメラ撮影
してるよ」

「やだっ！
嘘……」

「ほら
恥ずかし
がってないで
ポーズとって
あげなきゃ」

「ポ……
ポーズ？」

「そうだなあ……
両足広げて誘惑
する様な感じでさ」



「そんな……」

「出来るでしょ
……ね？」

「……」



「うんうん
こらう？」

「うんうん
良い感じ♪
それじゃあ
……
って感じで
言ってみようか」

「えっ!？」



「言わないと
バイブの
パワーを
上げるよ？」

「……分かった
言うわ……」

「カメラ撮影してる
男達に聞こえる様に
大きな声で……だよ♪」



「……皆さん、私……ドスケベ
性処理ロボットロールです♥」

「私、皆さんのバキバキ
勃起おち●ぽの処理を
したいんです……♥」

「……ですが、私は今この子専用の
性処理ロボットなんです♥」

「この後も家に帰ったら……
既にバイブでぐちよぐちよの
準備万端おま●こでこの子の
おち●ぽ、スッキリさせるんです♥」



「……皆さん宜しければ
私をカメラに収めて」

「オナニーのオカズに
ご利用ください……♡」



(皆が撮ってる……私の
破廉恥な姿を……
ああ……こんな事
いけないのに……)

(興奮しちゃってる♡
もう……ダメ……♡)

(ああ……♡
もう……♡)



ムチッ



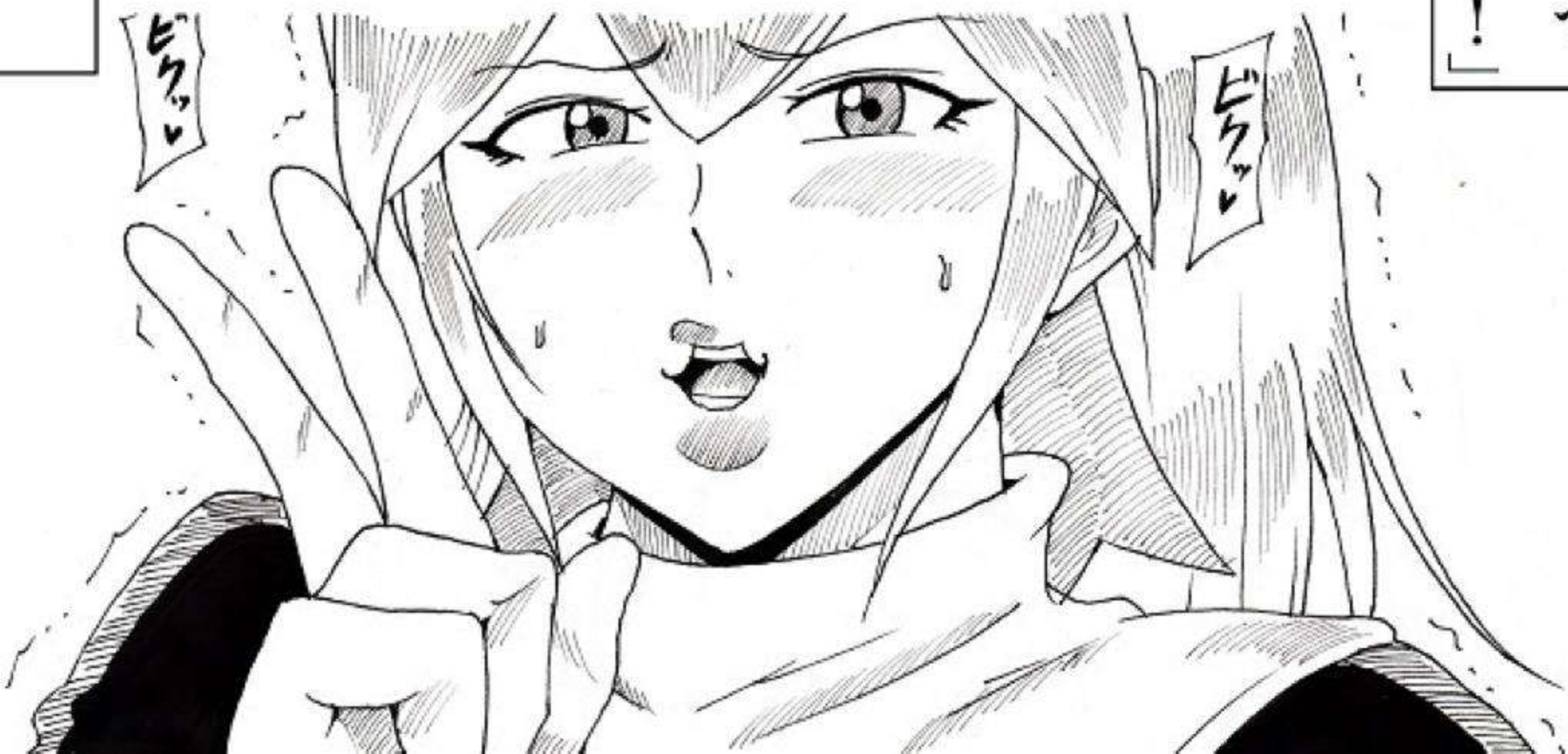
「おいおい！こいつ
イキやがったぞ！」

「すげーもん
撮れたな！」

「家まで我慢
できねえよ
今すぐ
シコリてえ!!」

（これで…
いいのよね
ロツク：❤️）

（ロールちゃん
グツジョブだよ♪）





「波動拳じゃ！
むう…何だか今日は
いけそうな気がするぞ！」
「それじゃあ、続けますよ…」

「どうですか、博士。
出来そうですか？」
ええと…」

「全く、おかしい理由を
つけてこんな事させる
なんて…」

「この変態博士！」

「おふっ!!」



「何ですか？
変態って言われて
興奮してるんですか！」

「エロ博士!!」

「おおおっ!!」



「ロボット工学の父が
聞いて呆れますっ！」

「おっ!!」

「自分で作った
可愛いロボットに
こんな事させてっ！」

「はひっ!!」



「ほらほら博士
出して下さいよ!
必殺の波動拳っ！」

「あっ!で…
出るっ…!!」

「何ですかこれ？
波動拳じゃない
ですよね？」

「お……おお……」

「これはいつも出してる
博士のくっさいザーメン
ですよ？」

「全く……やる気
あるんですか？」

「お……ふお……」



暴走したロボットが
街で暴れているという
ニュースが流れると
ロックマンの出勤です

早く街へ行かないと
いけません、まずは
ロックマンをイかせな
いといけません

最近は出勤前の一抜きを
してからというのが
ルーチンとなりました



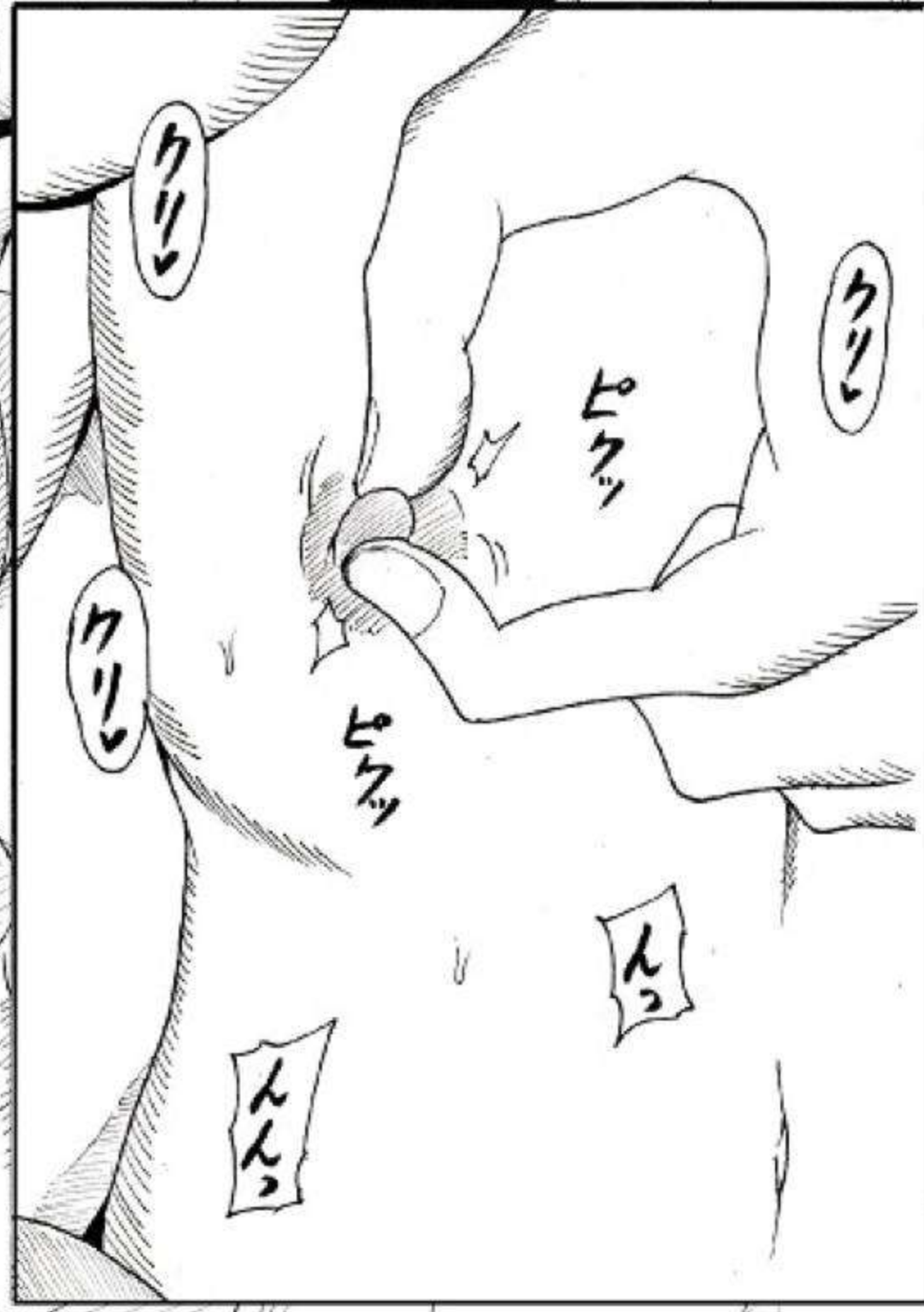
「ロック、どう？イけそう？
乳首クリクリされるの
好きでしょ？」

「うん、好き・・・おちんちん
ムズムズしてきたよ・・・」

「他にどんな事して
欲しいの？
ロックの為なら
何だってするわ・・・♡」

「今日はこれでいいよ
お互いにオナニーで
気持ち良くなるんだ♪」

「いいわ、ロックが
それを望むなら・・・♡」

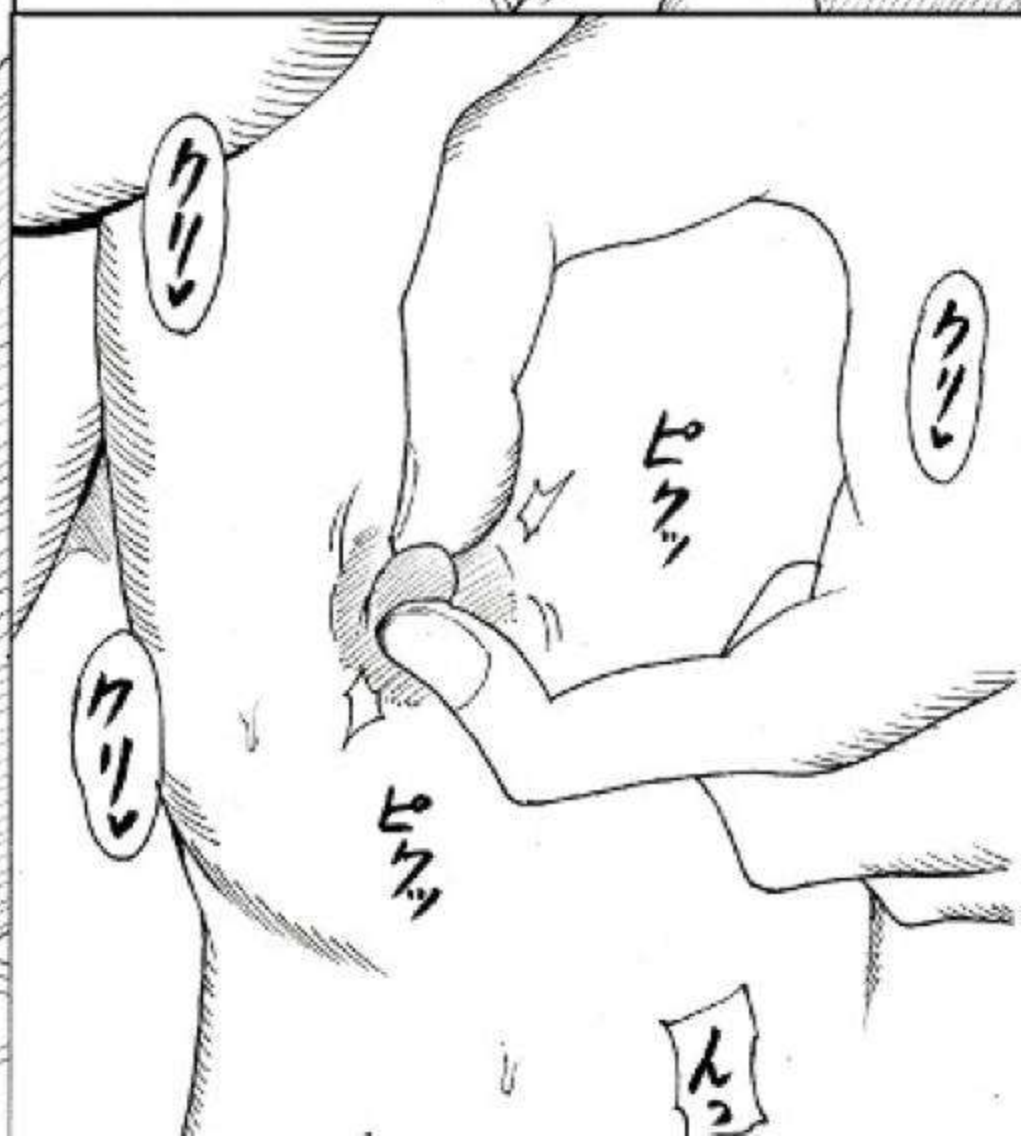


「ロールちゃんも……
気持ち良くなってる♪」

「あんっ ロック……♡
お返しよ♡えいっ♡」

「んんっ！」

「ピクピクしちやって
可愛いんだから……♡
さて、おち●ぽの
様子はどうかしら？」



「ああ……！
出るっ！！」

「うふ♥
ちゃんと出し切って
スッキリするのよ♥」

「……うん」



「どう？」

「スッキリした？」

「うん、ありがとう」

「ロールちゃん……」

「これくらいお安い御用よ♥」

「少しでもロックの役に」

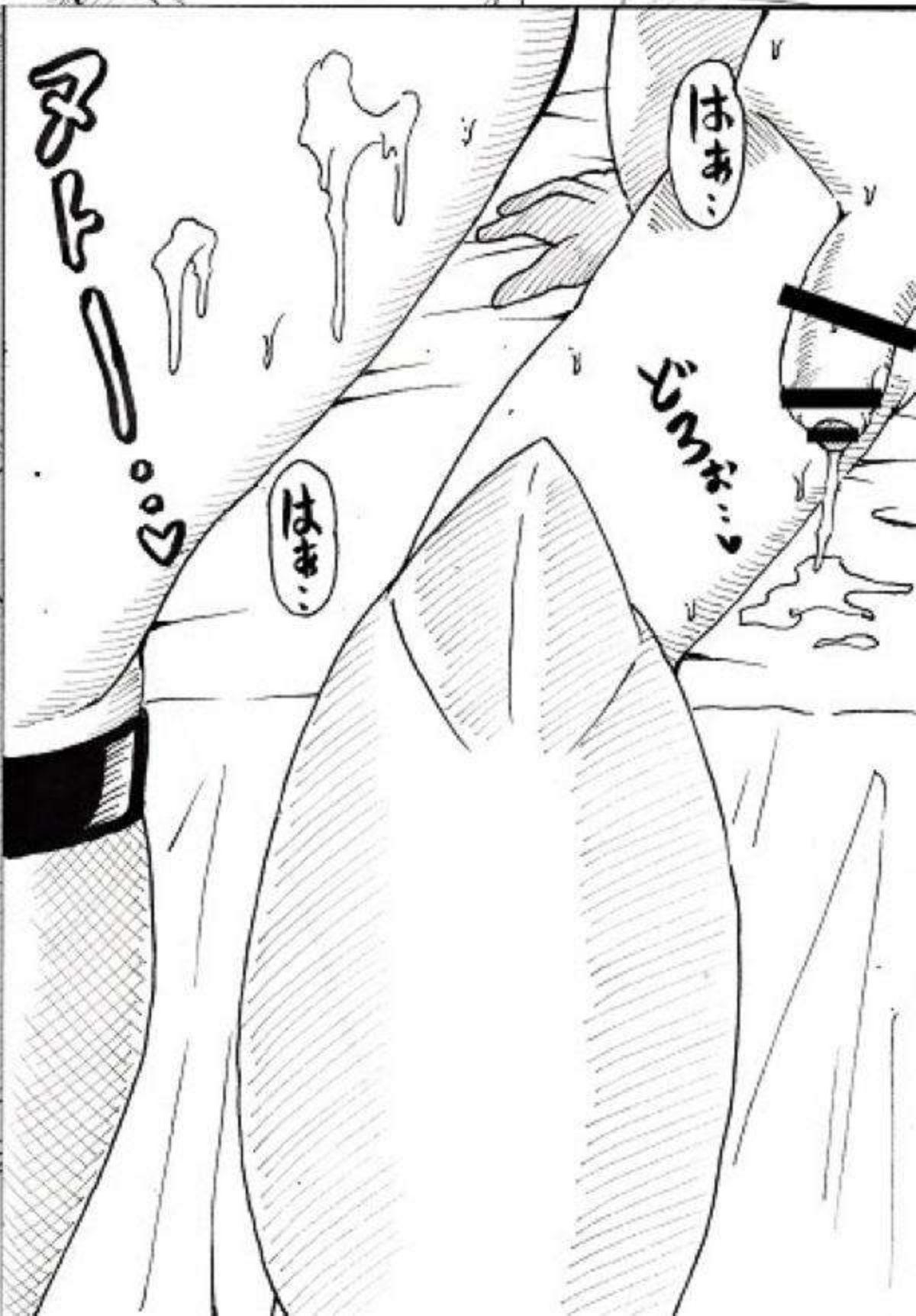
「立ちたいもの♥」

「……そろそろ出発出来る？」

「うん、街を平和に」

「してくるよ」

「頼もしいわね♥」



「はあ……」

「ふんふん……」

「はあ……」

「アッ……」

帰宅したロックは
家に入るなり私を
押し倒しました……



「ロック、帰ってくるなり
玄関で始めるだなんて……
お行儀が悪いわよ……！」

「いいじゃん！
ロールちゃんだって
その気だったんでしょ！
だって、パンツ履いて
ないもんね！」



「そ、それは……」

「気持ち良いよ
ロールちゃん！
ずっと、したか
ったんだよっ！」

「こんなところでなんて……
お部屋に行きましょ……」

「行く行く……
でも、その前に
ここで一回イッ
かないとね……♪」

「もう……♥」



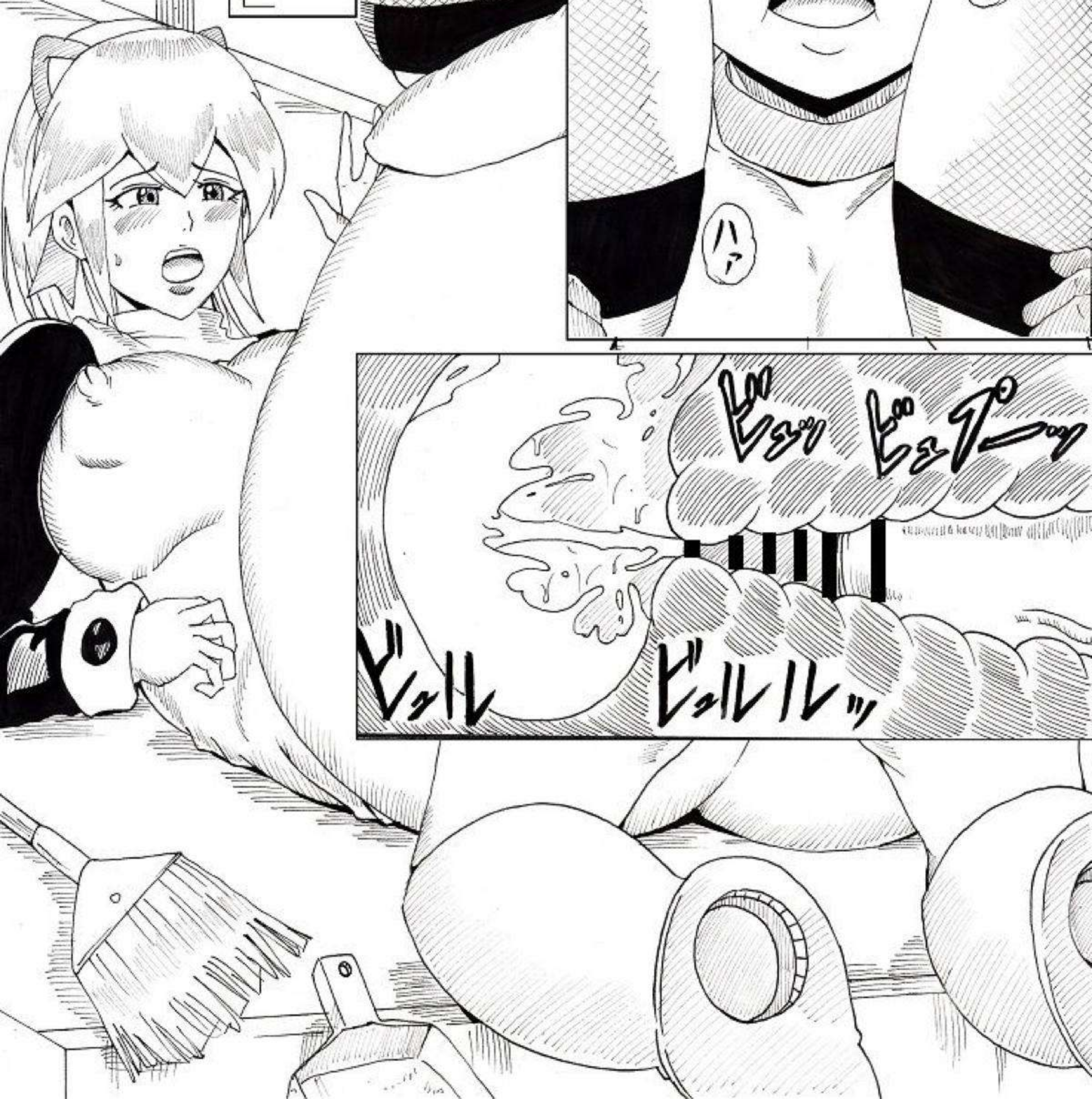
「ああ……
出る出る……！
イク、イクよお……
ロールちゃん……！」

「……ロツク♥」

「我慢してたから……
溜まってたから……♪」

「やだ……♡
ほんと、いっぱい……♡」

「ああ……
いっぱい出るよお♪」



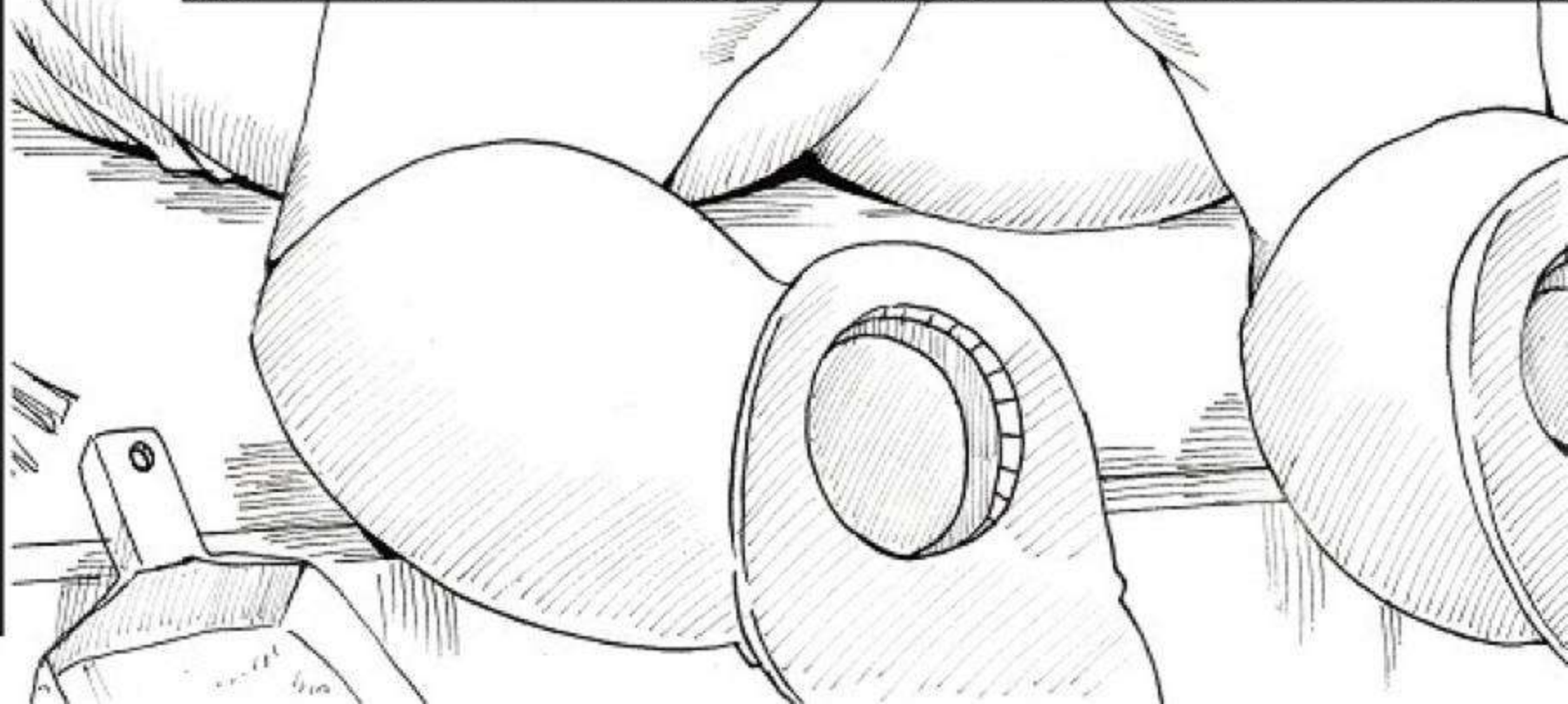


「ロツク……♡」

「ロールちゃん……
ありがとう
……好きだよ♡」



（それにしても凄い量
こんなに我慢して……
偉いわよ……ロツク♡）



「博士、ここで
するんですか？」

「そうじゃ、たまには
こういうのもいいじゃろ」



「先程まで人々の為に頑張って
戦ったロックの横でこんな事
して・・・起こさないように
しましようにね・・・♥」

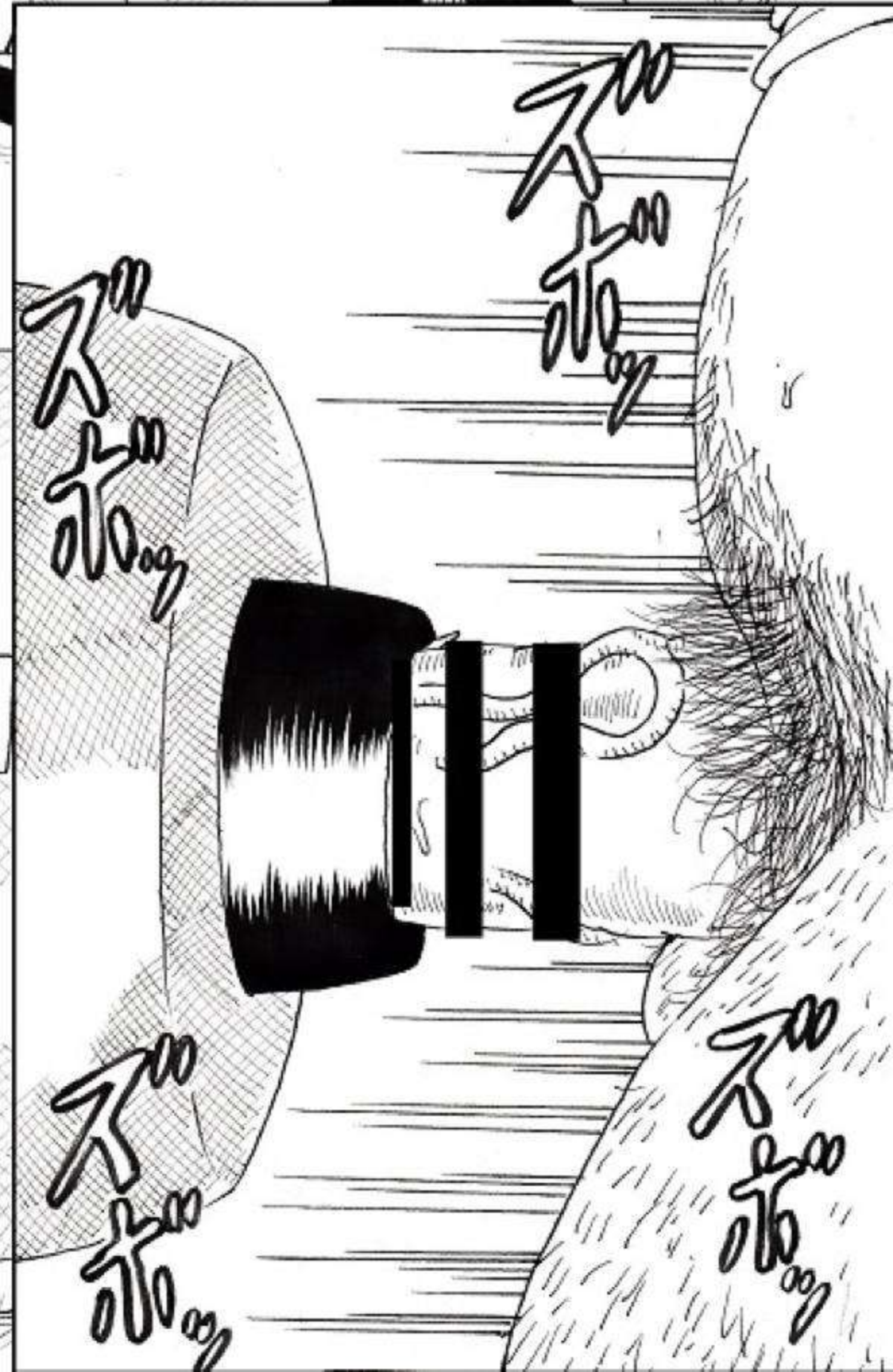
「うおお！
ロールツ！！」

「ご自身で作った
専用オナホール
ロールバスター
は如何ですか？」



「最高じゃ！
わしのち●ぽに
ばっちりフィット
してるんじゃ！」

「ふふ、それじゃあ
ロックが起きない程度に
堪能して下さい♥」



「う、ぐう……！」

「あらあら♥

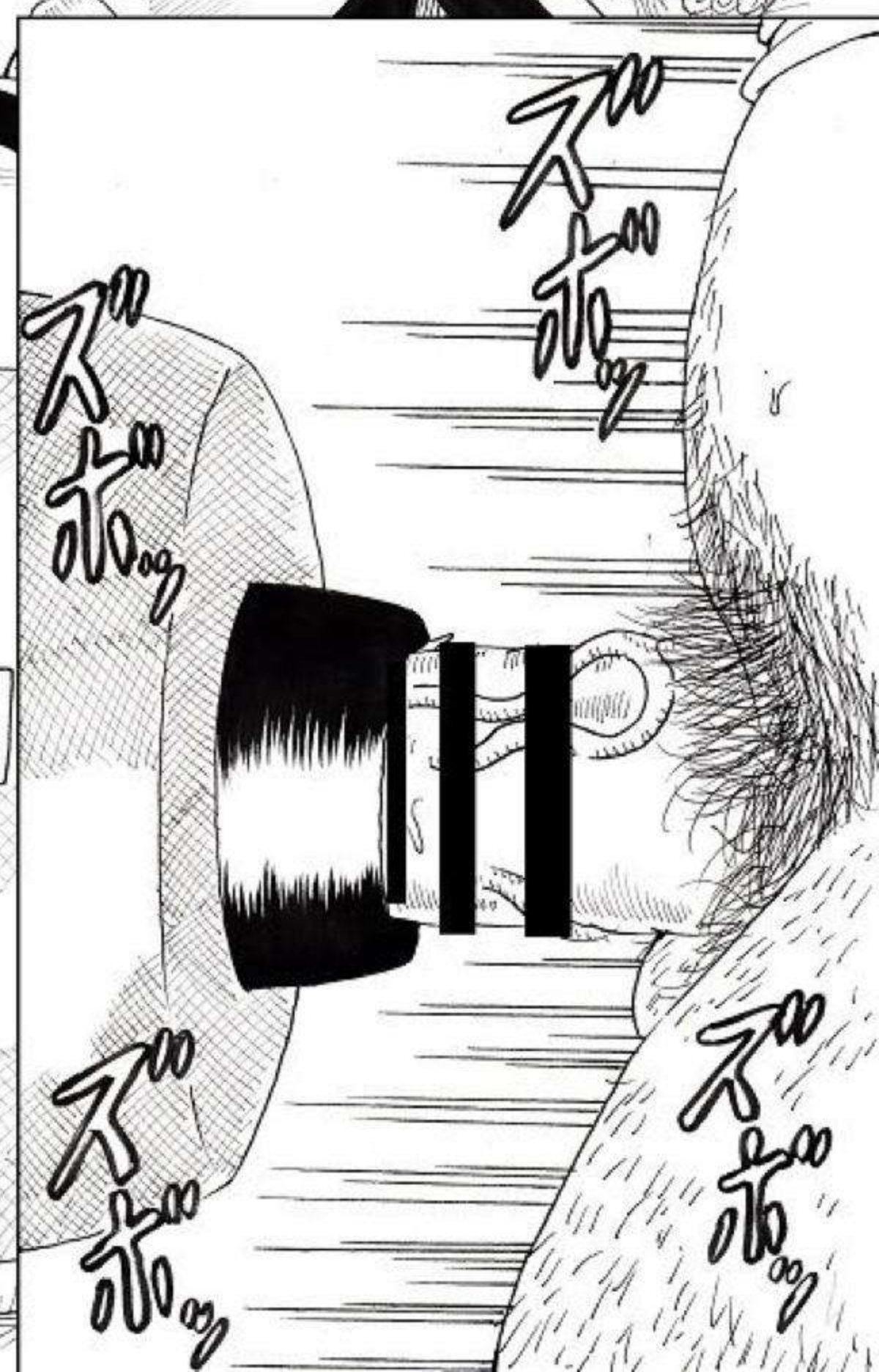
ロールバスター目掛けて
凄いい勢いで腰をお振りに
なつて……♥」

「はあはあ……！」

「全く、ロックが寝てるのに
みつともなく腰振つて……
困った博士ですね……♥」

「はあ！はあ！
ロール……！！」

「中でおち●ぽ
ビクビクしてます♥
そろそろ射精ですね♥」



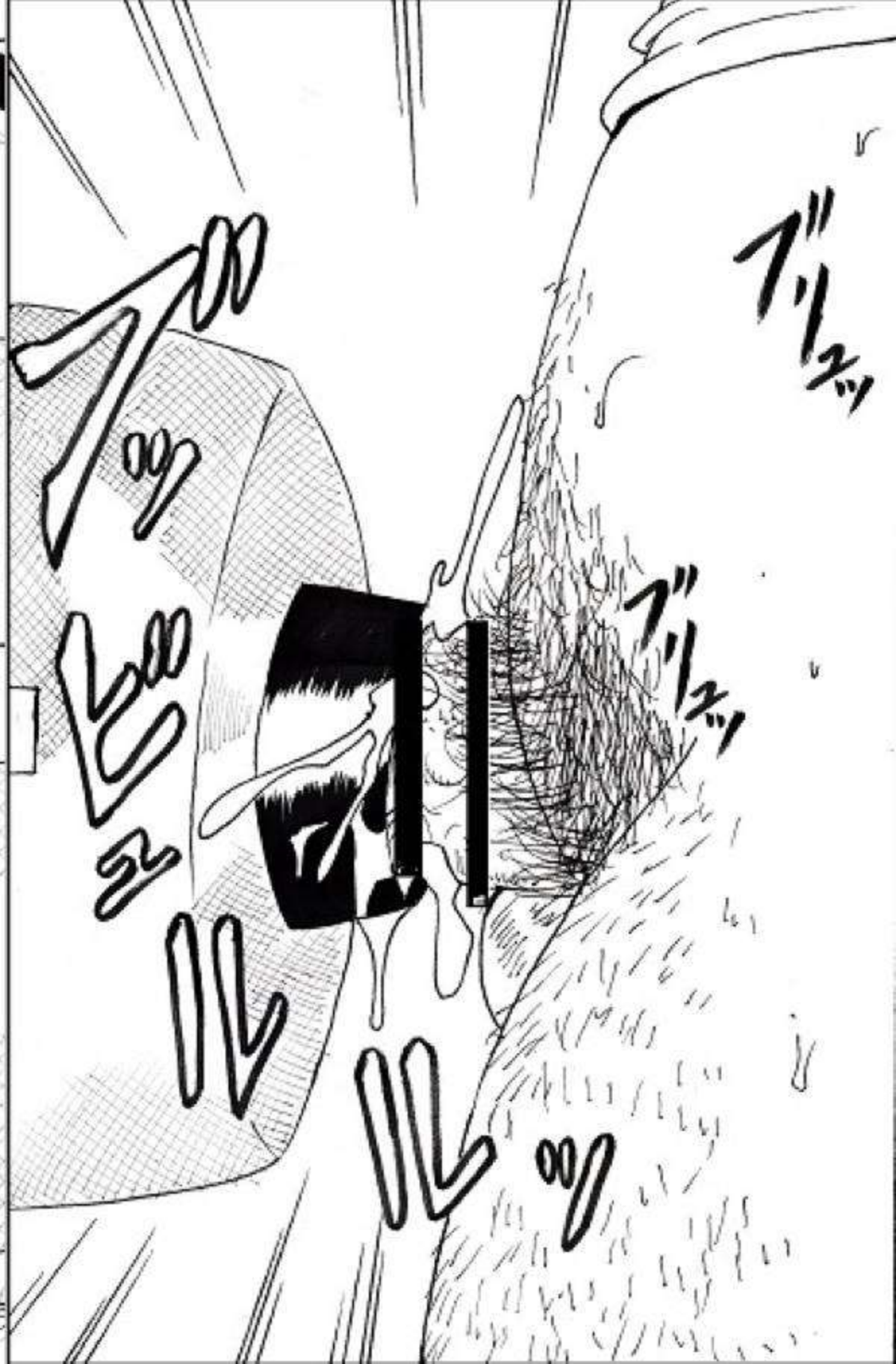
「おぐっ!!」

「ダメですよ
大きな声出しちゃ♥」



「うおお・・・
わかつとるよ・・・」

「今日も臭くてこっ तरीな
特濃ザーメンですね・・・♥」



「はあ……はあ……
全部出したよ……」

「ええ、お陰で中が
凄い事になってますよ♥」

「……ロツクは気づかんかった
みたいじゃな……」

「余程疲れてる
んでしようね
……」

(疲れてたはずなのに、帰宅してから
玄関で1発、お風呂で1発、ベッドに
入って3発……5回も私に中出し
したから……ね♥)



「お待たせ♥

久しぶりにこの服

着てみたけど・・・

二人とも、どうかな？」

「うむ、

とても可愛らしいな」

「可愛いよ

ロールちゃん」



「・・・ところで二人とも
股間がとつても
苦しそうだけど、大丈夫？」

「そうじゃな、今日まで一週間・・・
禁欲という約束じゃったからな」

「ロールちゃんを見てるだけで
ち●こおつきくなつちやう・・・」



「それにしても
食べ頃ね……♥」

「くう……ロール……」

「この舌で博士の
ちん皮めくって……
ちんカスパクパク
したいなあ……♥」

「うほお!!」

「ロールちゃんの唇……」

「ふふ……この唇でロックと
たっくさんキスしたいの……♥」

「したい!したいしたい!!」

ムク……

ムク……

ビキ……

ビキ……



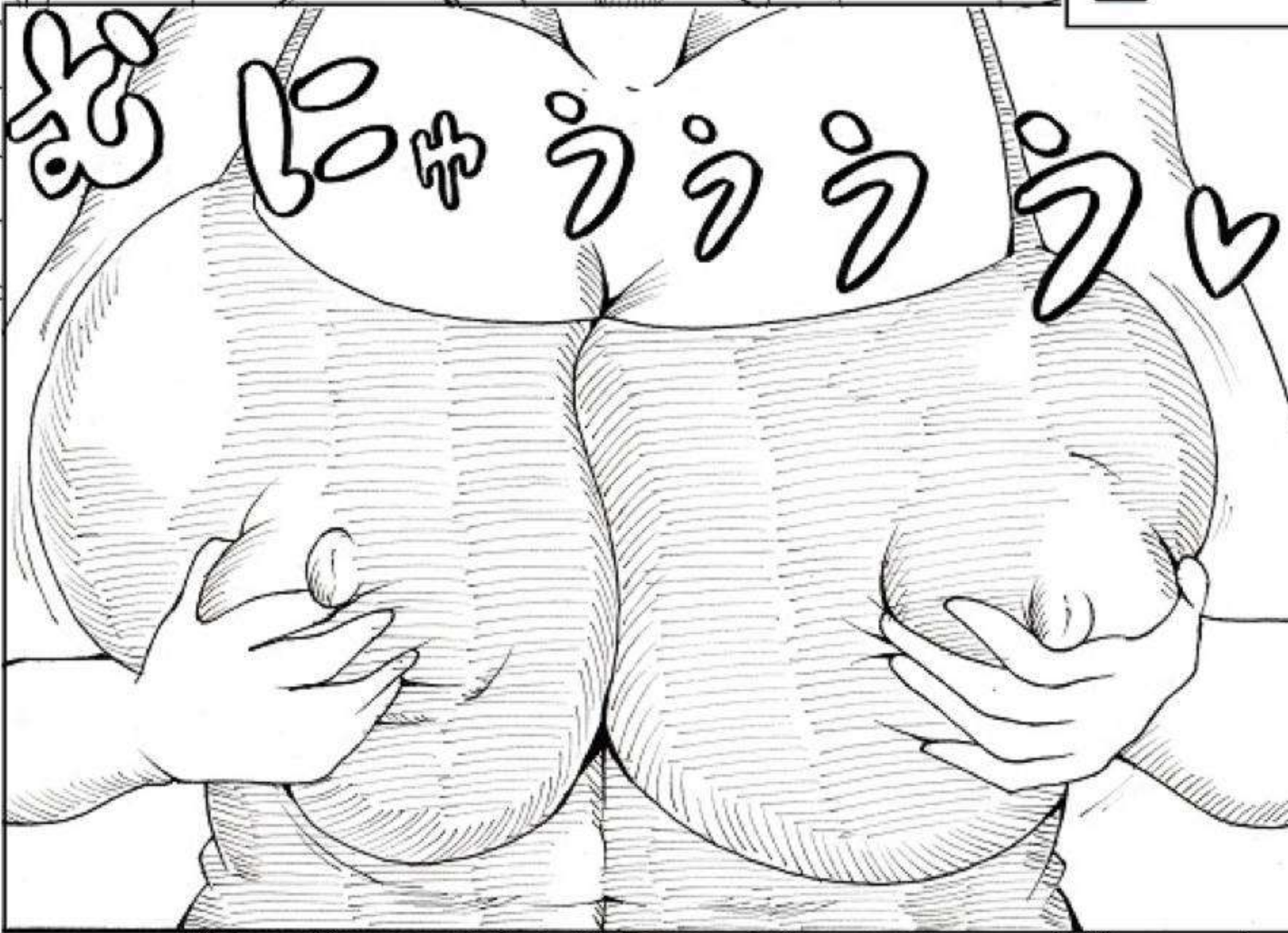
「うおお・・・」

圧倒的迫力・・・

早くおっぱい

しゃぶりたいのお」

「顔面突っ込んで
その柔らかさを
堪能したい・・・」



ビキ...

ビキ...

ムク...

「いくつになっても
男の人っておっぱい
好きよね♥
ほら、よく見て・・・♥
ん・・・♥はあ・・・♥
二人を虜にしちやう
ロールの爆乳・・・♥」

「ねえ、二人とも

こっちも見てみて♥」

「お、おお……！」

「見とるか、ロツク！」

「はい、パンツが食い込んで
ロールちゃんのおま●こが
くつきりと……！」

「ちよつと、夢中になりすぎて
顔が怖いわよ♥今日は二人で
私のおま●こ……好きにして
いいんだからね……♥」



「あらあら……二人とも
夢中になっちゃって……♡」



「いいわ、二人同時に
面倒見てあげる……♡」



「うほお！

良い匂いじゃ！

それに何という

柔らかさっ！」

「やん♥

博士、髭が

くすぐつたい♥」

「そんなもん我慢せい！

わしは今それどころじゃ

ないんじゃ!!」

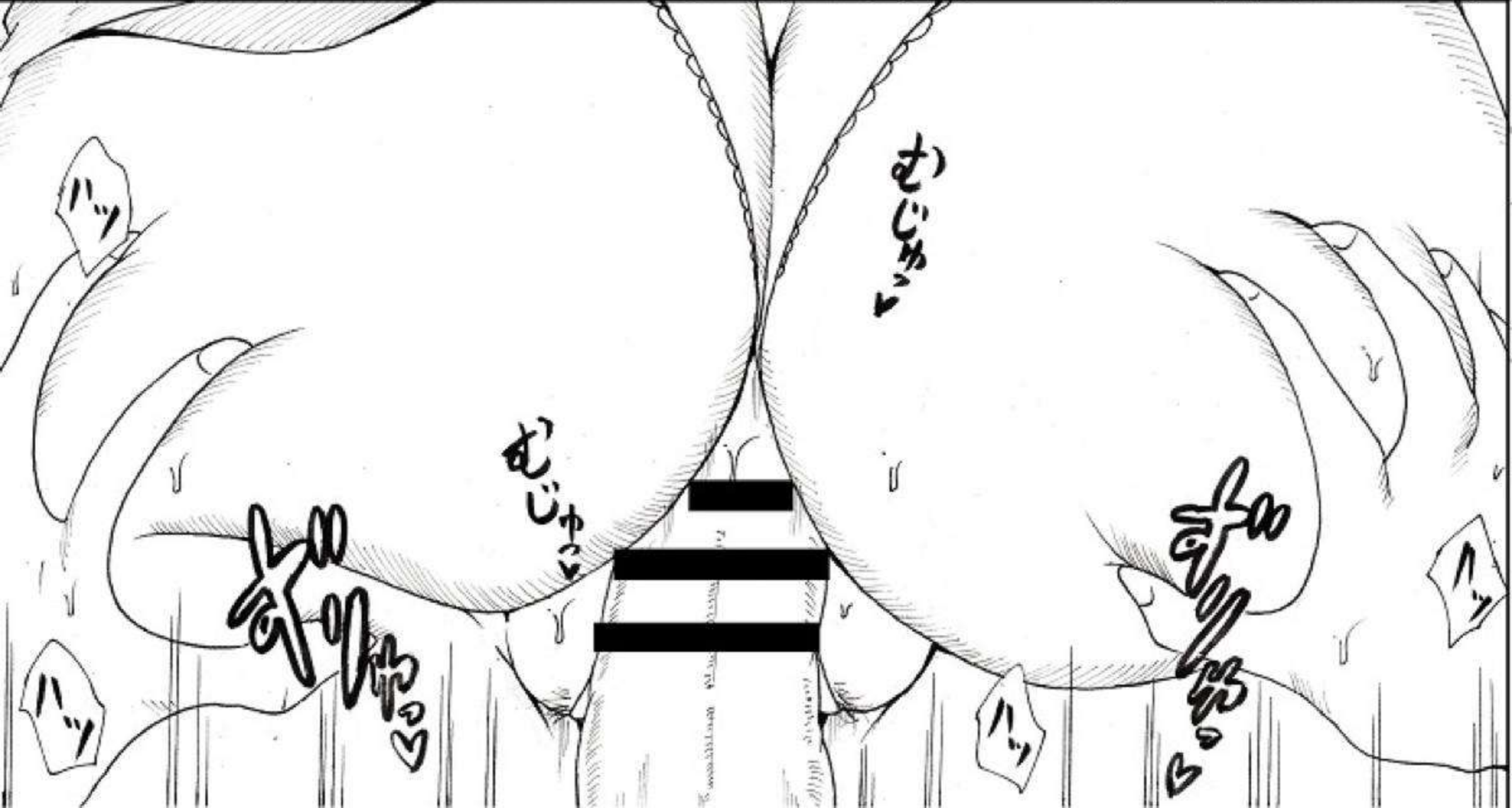
「まあ、博士つたら

勝手なんだから……♥」



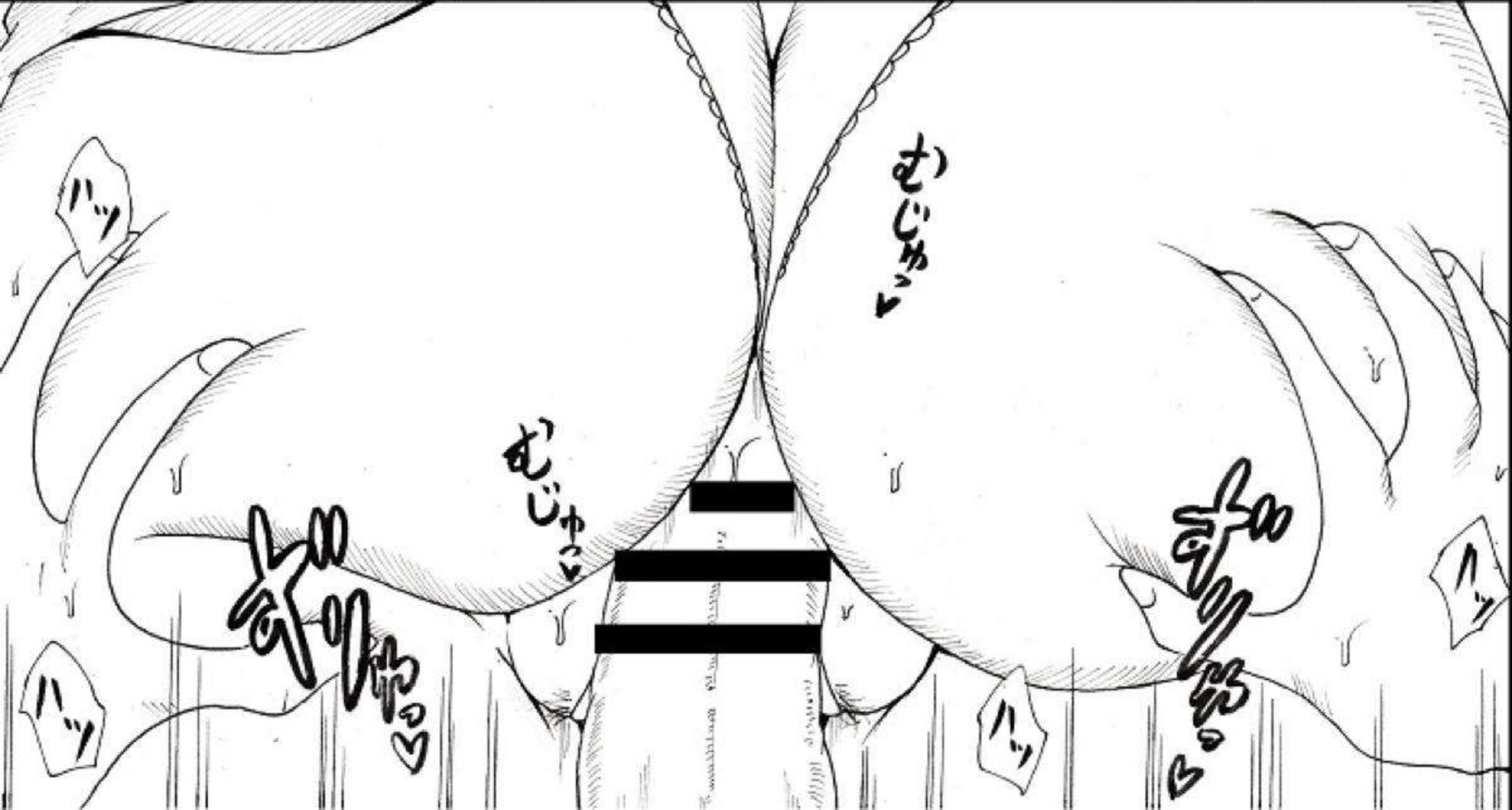
「ロールちゃん……
お尻のお肉が……
気持ち良い……」

「やあん♥そんな所に
挟んじやダメよ……♥
博士からもロックに
言っであげて下さい」



「ん？何か言ったか？」

「もう……二人とも
女の子の大事な所よ
もっと優しくしななきゃ
ダメでしょ……♡」



「ロールちゃん……
僕、もう我慢出来ない
だから……お願い……
おま●こさせて……」

「ふふ、そうよね
博士、ロックが先でも
宜しいですか？」

「それじゃあ、お言葉に
甘えて……♡」

「勿論だよ
さあロック、私が
見ているからロールと
おま●こしなさい」



「うう……ああ……」

「ロールちゃん……！」

「すんなり入ったわね♡
ロツクのおち●ぽ♡」

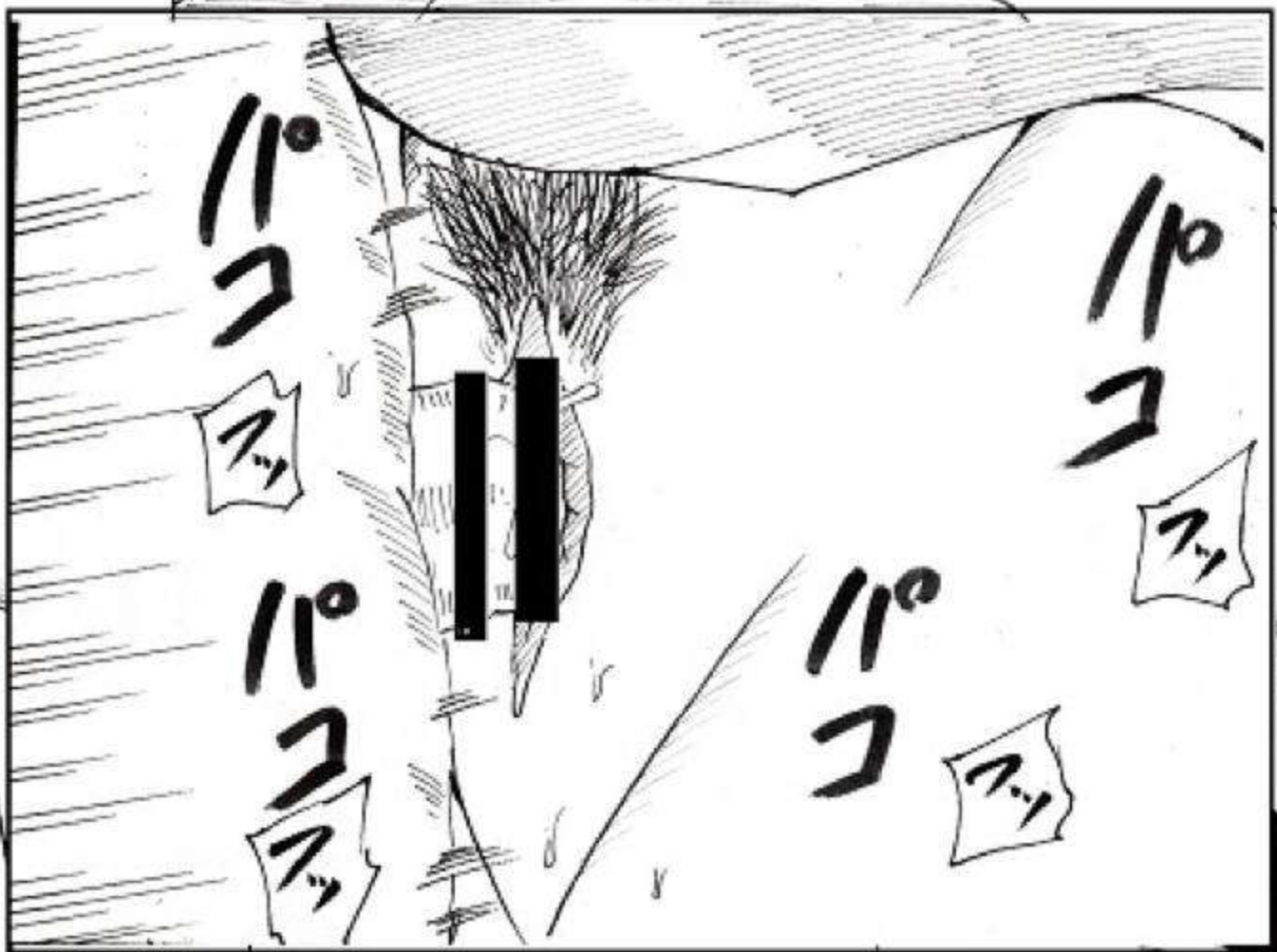
「見てるだけでは退屈じゃ
わしはおっぱいでも
吸ってようかのお♪」



「気持ち良い……
気持ち良いよお
ロールちゃん……！」

「馬鹿みたいに
腰振っちゃって……
可愛いわよ、ロツク♥」

「バカだもん！
毎日、ロールちゃんの
おま●こしか考えてない
バカだもん！」



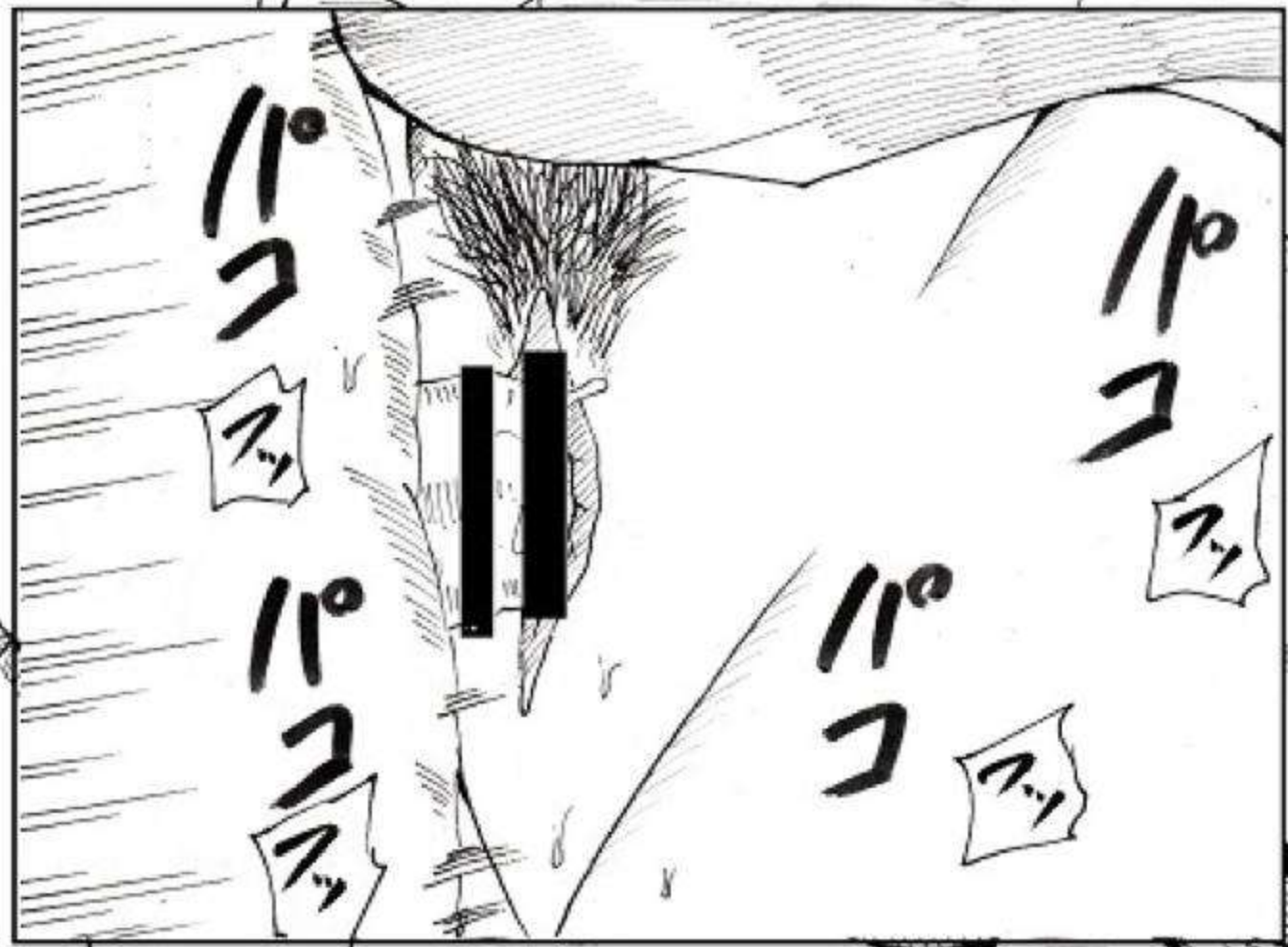
「すねちゃって
ほんと可愛い♥」

「あん♥二人とも
激しい……♥」

「ロールちゃん……
もう……！」



「ダメダメ♥
頑張って♥
もつとパコパコ
して……ね♥」



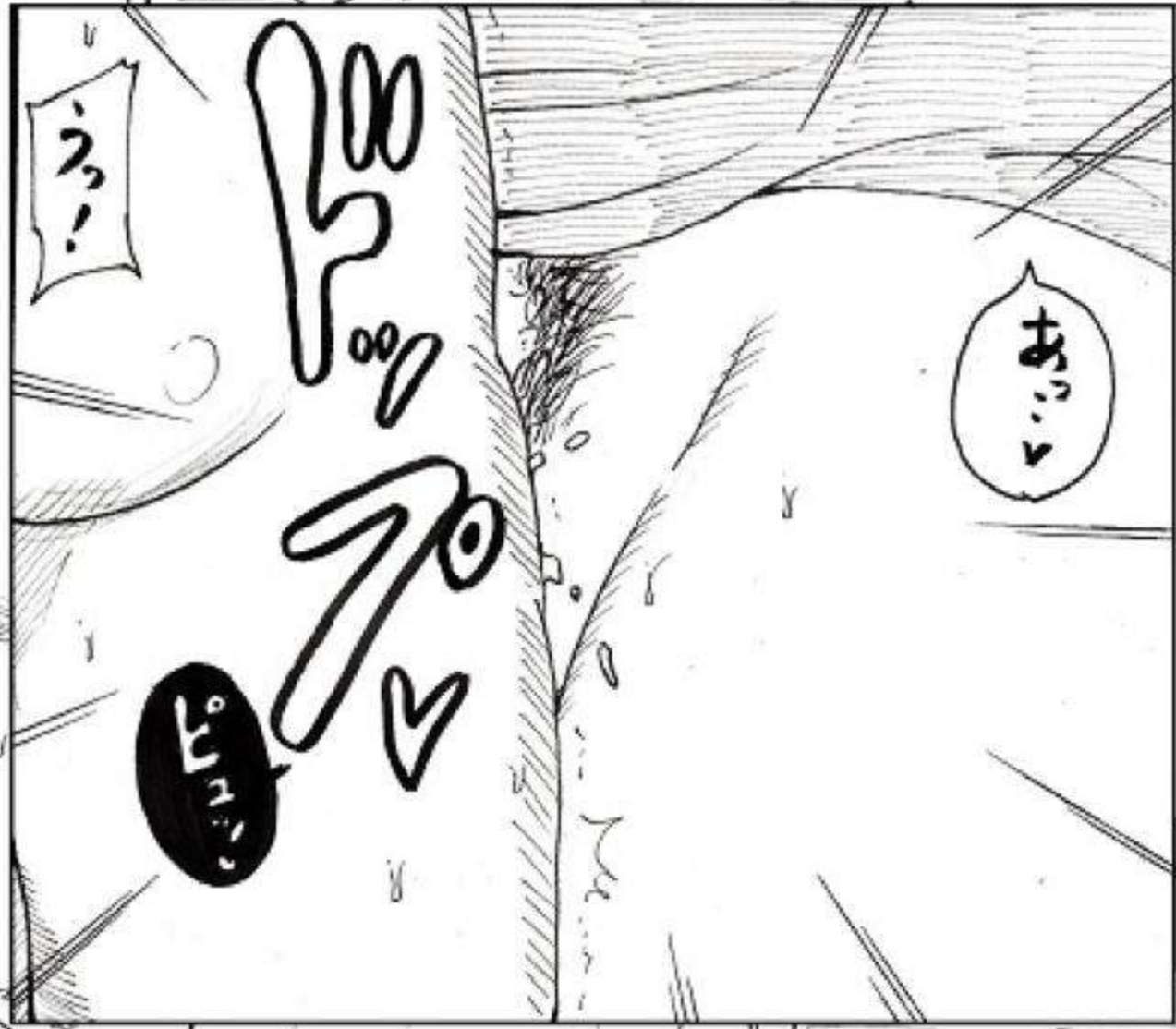
「うわああ……
ロールちゃん……！」



「ロールちゃん……
ほんと……もうムリ……」



「イクツ！」



「あん♥
来たあ♥」

「ロールちゃん……
僕、出したよ……
溜まってるの全部……」

「そう……良かったわ♥
それじゃあ、次は……」

「わしの番じゃな」

「博士……」



「次はいよいよ
わしとロールの
ラブラブ全裸
ファックじゃ！」

「ラ、ラブラブ……♡」

「折角じゃ
記念にビデオに
記録しておくか……
ロックよ、すまんが
撮影を頼めるかの？」

「は、はい
わかりました……」





「どうじゃ？
撮れてるか
ロツクよ？」

「は、はい」

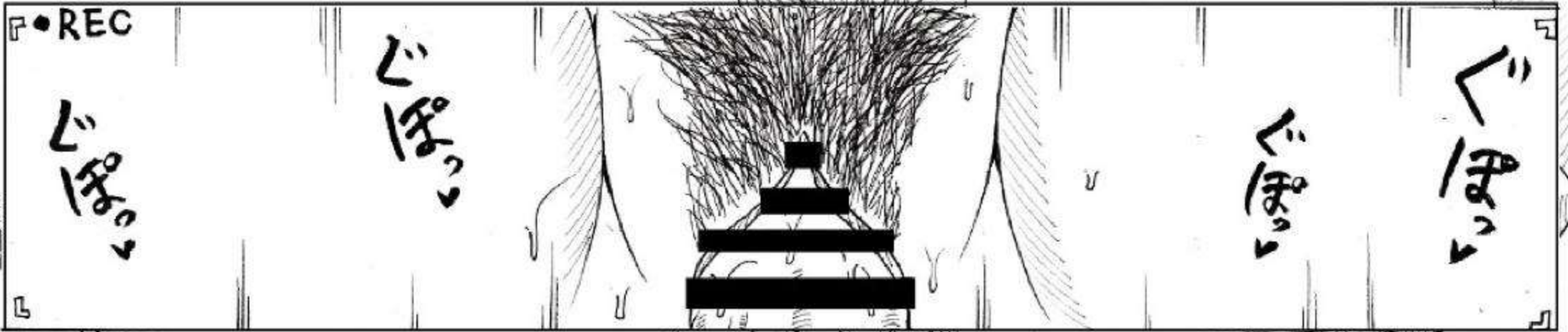
「ズームじゃ
ち●ぽのとこ
ズームで撮るんじゃ」

「はい・・・」

「それじゃピースでも
してみるかの♪」

「はい、博士♥」

「ロールちゃん・・・」





(ロック…今どんな気持ち？
…ヤキモチ焼いてる？)


(ロールちゃん
ってば博士と
あんなに仲良さ
そうに…)

(それに僕と
してる時より
気持ちよさそう
…博士のデカ
ち●この方が
いいの…?)

「いい…♡
博士のち●ほ♡」

「く…」





その後、博士とロールちゃんは
僕のことなんかお構いなしに
何度も体を重ねた……

「博士……今日は一段と
激しいです……♥」

「まだじゃー！
今日はとことん
やってやるぞお!!」

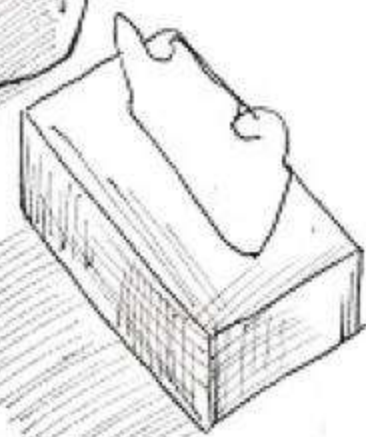
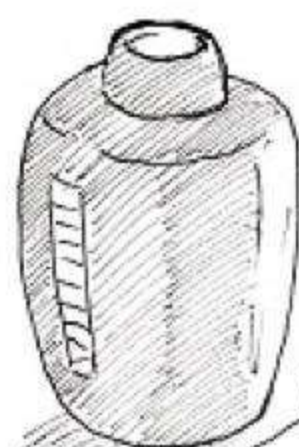
「ロール！」

どうじゃ!?

わしのち●ぽも

まだまだいける

じゃろ!?



「素敵です、博士♥

3度もイッた後とは

思えません♥」

REC

ずっ

ずっ

ずっ

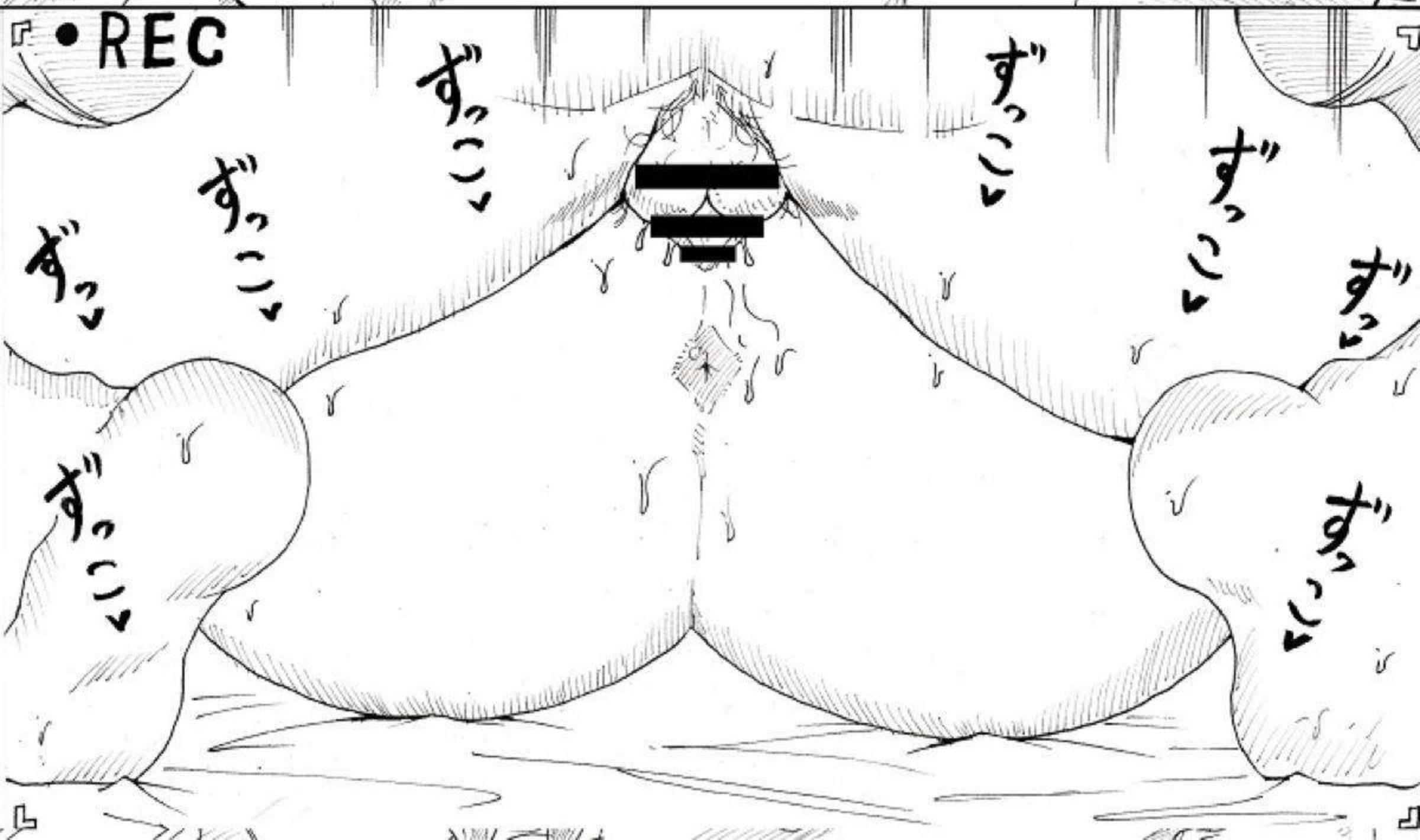
ずっ

ずっ

ずっ

ずっ

ずっ





じ



(博士、いつまでする
つもりなんだろ……
僕だっけしたいのに……)

(ロールちゃんだっけ
僕としたいはずだよね?)

(そうだよね
ロールちゃん……)

「酷いよ、僕を放っておいて二人で楽しんでさ……！」

「ごめんね、でも博士が相手じゃ仕方ないでしょ？」

「そりゃそうだけど……ロールちゃん、あんなにノリノリで……博士の事……す、好きなの？」

「勿論、好きよ
生みの親ですもの」

「……」



「でも、一番好きなのはロツクよ♥」

「…ほんと?」

「ええ、ほんとよ♥
私が一番好きなのはロツク♥」

「愛してる?」

「愛してるわ♥
今夜はベッドで好きにだけエッチしていいから…♥」



「眠くなったらそのまま寝ちゃっていいから…ね♥」

「エッチ…朝までする」

「ふふふ、そんなにエッチできるの?」

「出来る! 愛してるから!」

「そうね♥
それじゃあそろそろ愛し合いましょ…♥」

ロツクつたらムキになつちやつて

疲れたらE缶を使って無理やり朝までエツチをやり通しました

ロツク、それに博士手の掛かる二人に毎日苦勞しています

でも、それだけ

やりがいも感じます

男性奉仕用人型ロボット

としての本分を全う

出来ているからでしょう



これからもスケベな二人の要求に応える為全身全霊、私の使命を果たしていきたく思います

END